

日本と韓国の中学校用歴史教科書における 両国関係史の記述内容に関する研究

梅野正信 李明熙 二谷貞夫 釜田聡 金恩淑 具蘭憲*¹

(2006年10月18日 受理)

A Study of Japanese-Korean Relations presented in History Textbooks
for Junior High Schools in Japan and Korea.

UMENO Masanobu LEE Myunghee NITANI Sadao KAMADA Satoshi KIM Eunsook KU Nanhee

【要 約】

日本と韓国で現在使用されている中学校用歴史教科書に記載される、両国の関係・交流史に関する記述、また、両国の一方の教科書に記載され他方に関する記述、両国の比較が可能な記述等についての比較・考察研究。

【キーワード】 日韓 歴史教科書 日韓関係史

1. はじめに

本論は、日本の歴史と韓国の中学校用歴史教科書に記載された歴史的事実に関する記述をもとに、両国相互に理解を深めるために必要な歴史的事実を検討する基礎的研究である。

考察の対象とするのは、日本で2006年度から使用されている社会科（歴史的分野）の中学校用検定教科書8種類（大阪書籍、教育出版、清水書院、帝国書院、東京書籍、日本書籍新社、日本文教出版、扶桑社の8社、以下大籍、教出、清水、帝国、東書、日書、日文、扶桑と略記）と韓国で現在使用されている中学校用国史教科書*²である。

韓国の国史教科書と日本における検定歴史教科書は、制度面では、いずれも義務教育段階において必修使用され、国の定める基準に即して執筆され、同様の役割を担っているが、韓国の国史教科書は韓国の全ての中学生に使用され、日本では検定基準に即して検定を通過した8種（冊）の教科書から一定地域ごとに1種類（1冊）が採択、使用され、韓国の国史教科書が韓国史を中心として日本・中国等との関係史を加えた構成であり、日本の検定歴史教科書は世界史的内容を組み入れた構成である点で、相違する。

内容面では、各教科書とも、本文、本文を補足する注的記述、コラム・特集の記述、写真・図

表・年表等，学習活動の指示等から構成されている。さらに，本文や注釈等の記述は，事実を説明する記述と事実を評価する記述に分けられる。

本論は，事実を説明する記述を中心に検討する。以下抜粋し引用する記述中（）に頁数を記載する。

2. 建国神話に関する記述

韓国の現行（第7次）教育課程では，建国神話と関連しては指針を提示せず，古朝鮮の建国も，「古朝鮮をわが国の最初の国家であり，農耕文化と青銅器文化の発達過程において成立されたことを語るができる」と述べているだけである。しかし，建国神話については，教科書に詳しく取り扱われている。これらの記述は，第6次教育課程の教科書では部分的に紹介されていたが，現行教育課程の下での教科書には，最初の国家である古朝鮮と高句麗，百濟，新羅，伽耶の建国と建国神話が全て記述されている。

これは，韓国が古代国家の建国について重視する姿勢を反映したものと思われる。建国神話そのものを歴史的事実として捉えてはいないが，一定の歴史的な事実を反映しているとの視点から，建国神話の記述を活用して建国の歴史を推定する形がとられている。

以下，罫線内の引用はいずれも抜粋引用である。紙数の関係で（前略）及び（後略）等の記載は省略し，中略については「・・・」を付す。

・檀君の古朝鮮建国はわが国の歴史のととても古いことを物語る。また，檀君の建国の事実と「弘益人間」の建国理念は，わが民族が困難にあうたびに自負心を目覚めさせてくれる原動力になった。この他にも，檀君の建国説話を通して，わが民族がはじめて国を建てた多くの状況を推しはかることができる。熊と虎が登場することから，先史時代に形成されていた特定の動物を崇拝する信仰の要素が反映されていることがわかる。また，雨，風，雲をつかさどる人たちがいたということからは，わが民族の最初の国家が農耕社会を背景として成立したということも推しはかれる。(20)

・「読み物資料 檀君の建国」熊1匹と虎1匹が，同じ洞窟に住みながら常に神靈にあふれた桓雄に，人間になれるようにと請うた。桓雄は靈験あるヨモギ1袋とニンク20粒を与えて「おまえたちがこれを食べ，100日間日を見なければ人間になれるだろう」と言った。熊と虎はこれを食べながら洞窟生活を始めた。熊は三十七日（21日）間よくがまんして女性の姿に変わったが，虎はこれに耐えられずに飛び出して人間になれなかった。女性になった熊（熊女 ウンニョ）は，懇意の相手がいなかったの，いつも神檀樹の下で子どもを産ませてもらえるように祈った。これを見た桓雄は少しの間人間に姿を変えて彼女と結婚し，息子が産まれたので，その名前を檀君王儉（ダンゴンワンゴム）とした。(20)

・「新羅の建国神話」・・・朴赫居世（パク・ヒョッコセ）が高句麗の始祖朱蒙と同じように卵から生まれたということから，建国の主人公が太陽の子孫であることを自認する選民思想を掲げていたことがわかる。(40)

日本の検定歴史教科書では，記・紀編纂時期以前の頁では自然崇拝についてのみ記述し，「記・紀・風土記」編纂の箇所において神話・伝承の存在に触れるもの，独自に扱う場合も比較神話の視点からの解説が一般的であるが，記・紀編纂時期より以前の頁に建国神話を記載する教科書もみられる。

戦後日本の社会科教科書では，神話・伝承について，1947年版，1952年版，1955年版の『学習指導要領』において，科学的視点からの神話・伝承の批判的学習，神話・伝承の歴史的背景，比較神

話学の成果に基づく記述がみられたが、1968年版で小学校における神話・伝承の取り扱いが政治的論争となって以来、先述の如く、現行教科書（下記記載）にあるように、「記・紀・風土記」編纂時の記述において、内容のみ、もしくは比較神話学に関する記載が一般的である^{*3}。一部に2月11日に関する説明を加える記述がみられる（下線）。

以下日本の検定教科書については、各項の題目に該当する主要部分を抜粋引用する。

教 出	・国家が整った8世紀には、「古事記」「日本書紀」などの歴史書や、地方の地理や伝承などを記した「風土記」、天皇・貴族から民衆までの和歌を集めた「万葉集」などの書物がつくられました。(32)
清 水	・『古事記』や『風土記』などには多くの神話・伝承がのせられている。たとえば、八岐大蛇退治の神話には、水の神である大蛇をおさめ、豊作を祈った古代人の願いがうかがえる。このように、神話には古代日本人の自然観があらわれているものが多い。(45)
大 書	・国のしくみが整うと、国のおこりや天皇が国を支配する由来などを証明するため、『古事記』や『日本書紀』などの歴史書の編集が行われたほか、国司に命じて、郷土の地名・産物や伝説などを国ごとにまとめた、『風土記』がつくられました。・・・神話には、神々が国土をつくった「国生み」神話、実り豊かな農産物や海産物を生み出した神々の話、ヤマトタケルの国土統一の話などがあります。朝廷や豪族の家々の言い伝えなどをもとに、『古事記』、『日本書紀』におこまれたこれらの神話は、当時の信仰やものの考え方を示しています。また、神話のなかには、アジアや、ポリネシアなどの太平洋の島々の神話と共通するものもあり、日本の神話が広く世界とかかわっていたこともうかがえます。(35)
帝 国	・律令国家の成立とともに『古事記』や『日本書紀』という歴史書がつくられました。これは伝承や説話・神話をもとに、天皇が日本を統治するしくみとその正統性を明らかにする目的で書かれたものである。(42) ・「国生みの神話（日本）」2人の神、イザナギとイザナミは結婚して、八つの島々（日本）を生みました。（ハワイ諸島）天神ワケアはババ女神と結婚し、ハワイ諸島とマウイ島を生みました。(42) ・「天孫降臨の神話（日本）」日の神アマテラスは、子孫にあたるニニギを天上から高千穂の峰へとおろしました。（高句麗）天帝の息子解慕漱 <small>かいぼそ</small> は父の命令で、100人余りの従者をつれて地上に降りました。(42) ・「古代の神話」『古事記』や『日本書紀』のなかには、東アジアや太平洋地域の中の物語と似ている神話があります。(42)
東 書	・当時の人々は、太陽神や、水を支配すると考えていた蛇の神など、稲作に関係の深い自然の神々を信仰しており、また、一族を守る神に対する信仰も生まれました。古墳に描かれた絵や、後にまとめられた神話などから、死後の世界についての考え方を知ることができます。国のおこりについての神話や伝承も、次第に形づくられていきました。(25) ・神話や伝承の記述などをもとにまとめた「古事記」と「日本書紀」、また地方の国ごとに、自然、産物、伝説などを記した「風土記」がつくられました。(39)
日 文	・（大和朝廷の成立）このころから、自然や氏の祖先を神とする信仰のほか、氏のおこりや国のはじまりについての神話や伝承がめばえてきた。これらは、やがて日本の島々の誕生や国土統一の物語とにまとめられた。(17) ・朝廷は、国のなり立ちをまとめ、奈良時代のはじめに「古事記」「日本書紀」を完成させるとともに、国ごとに、地勢・伝説・産物などを記した「風土記」をつくらせた。(30)
日 書	・律令国家ができるのと、国のおこりや歴史についての関心が高まり、8世紀はじめに『古事記』と『日本書紀』がつくられた。また、地方の国ごとに地理・産物や伝説などを記した『風土記』もまとめられた。和歌もさかんで、『万葉集』がつくられた。(52) ・わたしたちの祖先は、ほかの民族と同じように、太陽や月、山や岩など、いろいろな自然物を神としておそれ、うやまつてきた。稲作がはじまってからは、太陽神や、水の神と信じられた蛇などに対する信仰が強まった。また、人々は、物事のはじまりや不思議なできごとを、神々のしわざと考えた。そして、これらの神々の物語（神話）をつくり、祭りなどで語り、後世に伝えた。『古事記』と『日本書紀』の神話は、天皇と朝廷がこの国を支配するいわれを説明するための物語である ⁴⁴ 。(53)
扶 桑	・・・「神武天皇の東征伝承」わが国で最も古い歴史書である『古事記』や『日本書紀』には、大和朝廷のおこりについての伝承が残っている。それは初代天皇とされる神武天皇をめぐる物語である。・・・2月11日の建国記念の日、神武天皇が即位した日として『日本書紀』に出てくる日付を太

陽暦に換算したものである^{*5}。(30)

・『古事記』がつくられ、民族の神話と歴史がすじみち立った物語としてまとめられた。ついで『日本書紀』が完成し、国家の正史として、歴代の天皇の系譜とその事跡が詳細に記述された。二つの歴史書は、天皇が日本の国を治めるいわれを述べたものであるが、その中で語られる神話の伝承からは、当時の人々の信仰やものの考え方を知ることができる^{*6}。(44)

3. 「古代国家の成立」に関する記述

韓国の国史教科書では、古代国家が成立し発展する時期は、韓民族の特性と韓民族文化の原型が形成される時期、民族や民族文化の基礎が整えられる時期ととらえられ、政治史を中心とし、海外との文化交流等は十分に記述されていない。また、韓国の教育課程では、古代国家の成立と発展について、「高句麗、百済、新羅および伽耶の成立過程を調べてみて、以後、各国の対外的活動の様子や新羅の三国統一の過程を把握する。そうして、わが民族の積極的な活動にプライドを感じて、民族史に対する自負心を持つ」と記され、古代国家の成立過程を調べ、対外的な活動を注目するよう提案しているが、「対外的な活動」とは、主には中国の諸民族や国家との交流や戦いを意味し、このため、日本との交流についての関心は薄い。百済の全盛期である4世紀の近肖古王代における百済の海外進出として記されるほか、伽耶文化の影響と関連して登場する程度である(下線)。日本の教科書に記載される「白村江の戦い」については、「百済と高句麗遺民の復興運動」(下線)として説明されている。

・鉄をうまく利用した部族は勢力を大きく広げ、国家に発展していくことができた。また、中国や日本とは陸路と海路を通じて文化交流を行った。(23)

・百済は、中国の東晋、伽耶、倭と外交関係を結んで高句麗を牽制した。これを基盤に、百済は黄海を渡って、中国の遼西・山東地方と日本の九州地方に進出して、活動舞台を海外に広げた。(39)

・新羅は辰韓諸国を征服して洛東江流域にまで領土を拡張し、高句麗広開土(クァンデドデワン)王の助けで倭軍を撃退した。(40)

・金官伽耶はこの地域で生産される豊かな鉄を、中国の郡県や倭に輸出する交易の中心地としての役割を果たした。(42)

・高句麗が倭軍と戦う新羅を助けるために5万の軍勢を送って伽耶地域を攻撃すると、金官伽耶は大打撃を受け、盟主としての地位は動揺した(43)

・「高句麗の伽耶連盟軍攻撃」高句麗広開土大王は新羅の奈忽王の救援要請を受けて、百済、伽耶、倭の連合勢力を洛東江の中下流地域まで追撃して殲滅した。(43)

・伽耶の一部勢力が日本に進出し、日本の古代文化発展に貢献した。(44)

・「読み物資料 広開土王の征服活動」高句麗は漢江以北の土地をすべて占有した。また、5万の軍隊を新羅に送って、侵入した倭軍を洛東江流域から追い払った。(49)

・百済が本格的な中興の基盤を整えたのは、6世紀中頃の聖王のときだった。聖王は首都を、狭苦しい熊津城から広い平原である泗比城(扶余)に移し、国号を南扶余に改めた。このとき、中央に22の実務政庁を置き、首都に五部、地方に五方を置いて、王権の強化を図った。そして仏教を奨励し、中国と文物を交流し、倭とも友好関係を持ち、仏教などさまざまな文物を伝えた。(53)

・新羅は智証王(チジョンワン)を経て法興王(ポップワン)、真興王(チヌンワン)にいたり、めざましく発展して三国を統一できる基盤を整えた。智証王のときには今の鬱陵島(ウルルンド)である干山国(ウサンクク)を征服し、政治制度をさらに整えていった。(54)

・法興王のときには国の法律である律令を頒布し、十七官等やあらゆる役人が着る公服を定めた。このとき「建元」という年号を使用した。これは中国と対等な国という自主意識を表したものである。(54)

・真興王は国力の飛躍的な発展に助けられて国の立場を高め、自身を皇帝になぞらえて「大王」または「朕」と称し、「開国」などの年号を使用して自主意識を表した。(56)

・三国は中国と平和的な交渉をくり広げたり、中国の侵略に対して果敢に対抗して戦った。その他に北方民族や倭などと交流した。そして時刻の発展に必要な中国の先進文明を積極的に受け入れ、政治的、文化的利益を得た。(59)

・長い間の分裂と混乱をくり返してきた中国が隋によって統一された。そこで、国家的な危機に陥っていた新羅は随に助けを求めた。一方、隋の登場に脅威を感じた高句麗は、同じ立場にある遊牧民族の突厥と連合して隋に対抗した。そして、新羅と敵対関係にあった百済は、高句麗と力を合わせて新羅に立ち向かった。こうして6世紀末、東北アジアの国際情勢は高句麗・百済・倭・突厥をつなぐ南北勢力と新羅、隋（唐）をつなぐ東西勢力間の争いの様相を呈した。(59)

・「学習の手助け 百済と高句麗遺民の復興運動」・・・また、百済が滅亡した後に、百済人たちは侵略者を追いつく戦いを続けた。王族福信（ボクシン）と僧道探（トチム）は周留城（チュリョソン）（忠南舒山 チュンナムソチャン）で、黒齒常之（フクチサンジ）は任存城（イムジョンソン）（忠南 礼山イェサン）でそれぞれ兵をあげると、200あまりの城が呼応して多に氣勢を上げた。彼らは日本に行っていた王子豊（ブン）を迎えて王とし、泗比城を包囲してここに駐屯していた唐軍と新羅軍を攻撃した。しかし、百済復興運動は指導層の内紛で失敗し、これを助けようとした日本の勢力も白江（ベッカシ）（錦江〔クムガン〕下流）で撃退された。(64)

日本の歴史教科書には、下記のように、古代における韓国との関係や交流、渡来人等が比較的詳しく記述されている。

清 水	<p>・中大兄皇子と中臣（のち藤原）鎌足が中心となって蘇我氏を倒した。これは、強大な唐や朝鮮の動きに対抗して、日本でも天皇が直接政治を行う仕組みをつくり、国力の強化を目指したものである。(40)</p> <p>・朝鮮半島では新羅が唐と連合して百済を攻めた。日本は古くからの友好国である百済を救援するために大軍を送ったが、663年、白村江で敗れた。こののち、中大兄皇子は大津（滋賀県）で天智天皇として即位し、唐が攻めてくることを警戒しながら、国内を改革することに専念した。(40)</p> <p>・奈良盆地西北部に、唐や新羅の郡を参考にした平城京（今の奈良市）が710年に完成した。それから80年あまりを奈良時代という。(42)</p> <p>・「水城跡」白村江の戦いに敗れたのち、新羅などの攻撃に備えて大宰府の近くに作った。敵の攻撃を防ぐため、川をせきとめて水をためたと考えられている。(40)</p>
大 書	<p>・唐と新羅が連合して百済をほろぼそうとしたとき、中大兄皇子は、百済を助けるために軍隊を送りました。しかし、戦いに敗れた皇子は、九州北部に防人とよばれる兵士をおいて唐や新羅の攻撃に備える一方、大津（滋賀県）で即位して天智天皇となり戸籍をつくるなど、国内の制度づくりを急ぎました。(28)</p> <p>・「山城と水城」唐・新羅との戦いに敗れた日本は、九州北部の瀬戸内地方を中心に百済からの渡来人の力をかりて山に石垣をめぐらせた朝鮮式山城を築き、唐・新羅の攻撃に備えました。上の大野城と水城は、大宰府を防衛するためにつくられたものです。水城は高さ約10m、長さ約1kmの土の壁で、その博多湾側には、幅約60mの堀がつけられました。(29)</p>
帝 国	<p>・朝鮮半島でも、3～4世紀ごろ、小国勢の分立から統一に向かい、高句麗・新羅・百済から強大となりました。ヤマト王権は、半島南端から加羅（加那）地域とのつながりを深めながら、百済と連合して高句麗や新羅と戦いました。ヤマト王権は、各地の豪族たちとの関係を強め、その地位を保つために、朝鮮半島から鉄などの進んだ技術や物を安定して手にいれる必要がありました。5世紀後半に、ヤマト王権の王ワカタケルが、「大王」を名乗り鉄剣を関東や九州の豪族に与えたのも、国内でのお互いの結びつきを深めたいという願いからでした。5世紀になると、ヤマト王権は中国の皇帝へたびたび使いを送り、その力を借りて朝鮮半島諸国に対して優位にたとうとしました。しかし、朝鮮半島での争いに敗れることもあり、安定して鉄を手に入れることはなかなかできませんでした。(29)</p> <p>・朝鮮半島では、新羅が唐と結んで、百済を攻めたので、倭国は百済を支援するため大軍を送り、新羅・唐の連合軍と戦いました。しかし、663年、倭国の軍は白村江で大敗し、朝鮮半島から退きました。倭国は、唐・新羅が攻めてくるのに備え、山城や水城を築くなど守りを固めるとともに、日本に逃れた百済の人々の知識や技術を取り入れて、本格的な国内の改革にとりかかりました。(33)</p>
東 書	<p>・朝鮮半島では、高句麗と、4世紀におこった百済・新羅の三国が、互いに勢力を争っていました。大和政権は、百済や、小国が分立していた加羅（任那）地方の国々と結んで、高句麗や新羅と戦いました。(26)</p> <p>・高句麗の好太王（広開土王）の功績をたたえる石碑には、好太王が、しばしば倭の軍を破ったことが記されています。(26)</p> <p>・5世紀には、大和王権の王は九州から東北地方南部に至る各地の豪族を従え、大王とよばれるようになりました。大王は、倭の王としての地位と、朝鮮半島の南部を軍事的に指揮する権利とを中国の皇帝から認めてもらうために、中国の南朝に、たびたび使いを送りました。(倭の五王) (26～27)</p>

	<p>・「倭王武の手紙」高句麗が邪魔をしています。今度こそ高句麗を破ろうと思いますのでわたしに高い官位を与えて激励して下さい。(26)</p> <p>・朝鮮半島では、6世紀に百済や新羅が勢力を強め、このため、大和政権は朝鮮半島南部での勢力を失いました。(32)</p> <p>・聖徳太子が摂政となり、蘇我馬子と協力しながら、中国や朝鮮に学んで、天皇を中心とする政治制度を整えようとしてきました。(32)</p> <p>・朝鮮半島では、新羅が唐と結んで、百済や高句麗を滅ぼしました。日本は百済を助けるために大軍を送りましたが、新羅・唐の連合軍に敗れました(白村江の戦い)。その後、新羅は唐の軍隊をも追い出して、朝鮮半島を統一しました。(34)</p>
日 文	<p>・「倭王武の手紙」使いの船を送りましたが、高句麗が道をふさいでいるので、進めることができません。皇帝のお力でこの強国をおさえることができたなら、さらに忠誠をつくりたいと思います(『宋書』倭国伝の一部の要約)(17)</p> <p>・朝鮮半島では、唐と結んだ新羅が高句麗と百済を滅ぼし、半島を統一した。日本の朝廷は、百済の求めに応じて援軍を送ったが、唐・新羅軍に白村江で大敗した。その後、中大兄皇子は、大津(滋賀県)に都を移し、天智天皇となり、初めて全国の戸籍をつくるなど、国内政治の改新に力を注いだ。(大野城)白村江の戦いのあと、日本は、大宰府を守るために大野城を築くなど、唐・新羅の連合軍の攻撃に備えて、西日本の各地にとりでを築いた。(19)</p>
日 書	<p>・5世紀の倭国の大王は、5代にわたって中国の宋の皇帝に使者を送った。大王は倭国王としての地位と、朝鮮半島南部を支配する将軍としての地位を認めてもらおうとつめていた。「武」という大王は、中国の皇帝に手紙を送り、ほぼ望んだとおりの地位を認められた(36~37)</p> <p>・朝廷の中で、勢力をのばしてきた大臣の蘇我氏は、渡来系の豪族と結びつき、仏教を受け入れようとした。6世紀末には、仏教の受け入れに反対する物部氏をほろぼし、政治の実権をにぎった。(41)</p> <p>・朝鮮などに学んで冠位十二階を定め、能力や手柄に応じて豪族に冠位を与えるようにした。また、儒教や仏教などの思想を取り入れて十七条の憲法を定め、豪族は朝廷の役人として大王につかえることなどを示した。(41)</p> <p>・朝廷は百済を救うために軍を送ったが、白村江の戦いで、唐・新羅連合軍に大敗した。そこで朝廷は西日本の守りをかため、都を大津(滋賀県)に移した。(42)</p>
扶 桑	<p>・高句麗は、4世紀のはじめに、朝鮮半島内にあった中国領土の楽浪郡(現在の平壤[ピョンヤン]付近を中心とした地域)を攻めほろぼし、4世紀後半には半島南部の百済をも攻撃した。百済は、大和朝廷に助けを求めた。日本列島の人々をはじめ、貴重な鉄の資源を求めて半島南部と深い交流をもっていたので、大和朝廷は、半島南部の任那(加羅)という地に拠点築いたと考えられる。大和朝廷の軍勢は、百済を助けて、高句麗とはげしく戦った。高句麗の広開土王(好太王)の碑文には、そのことが記されている。高句麗は、百済の首都漢城(現在のソウル)を攻め落としたが、百済と大和朝廷の軍勢の抵抗にあつて、半島南部の征服は果たせなかった。(32)</p> <p>・大和朝廷があえて南朝の朝貢国になったのは、高句麗に対抗し、朝鮮南部とのつながりを維持するためだった。(33)</p> <p>・百済からは助けを求める使者が、日本列島にあいついでやってきた。新羅は、任那をもおびやかすようになった。562年、ついに任那は新羅にほろぼされ、大和朝廷は朝鮮半島における足かかりを失った。(33)</p> <p>・朝鮮半島の百済・高句麗、新羅は隋に朝貢した。日本も、これにいかに対応するか、態度をせまられることになった。(34)</p> <p>・煬帝は、高句麗との戦争をひかえていたので、日本と高句麗が手を結ぶことをおそれて自重し、帰国する小野妹子に返礼の使者をつけた。(36)</p> <p>・聖徳太子は高句麗の僧を仏教の師としていたので、隋と高句麗の関係をつかんだうえでタイミングを選んだと考えられる。(36)</p> <p>・朝鮮半島では、新羅が唐と結んで、百済を攻めた。日本と300年の親交がある百済が敗れ、半島南部が唐の支配下に入ることは日本にとっても脅威だった。そこで中大兄皇子を中心とする朝廷は、百済を助けるために、多くの兵と物資を船で送った。唐・新羅連合軍との決戦は、663年、半島西部の白村江で行われ、2日間の壮烈な戦いののち、日本側の大敗に終わった。(白村江の戦い)日本の軍船400隻は燃え上がり、空と海を炎で真っ赤に染めたという。こうして百済は滅亡した。新羅は唐と連合して、高句麗もほろぼし、朝鮮半島を統一した。(40)</p> <p>・百済からは、王族や貴族をはじめ、一般の人々までが日本に亡命してきた。そのうち一部は近江(滋賀県)、一部は東国に定住した。朝廷は彼らをあつくもてなし、政治の制度の運営についての知識を得た。白村江の敗北は、日本にとって大きな衝撃だった。唐と新羅の襲撃を恐れた日本は、九州に防人を置き、水城を築いて、国をあげて防衛に努めた。(40)</p>

4. 渡来人, 渡来系文化に関する記述

日本の検定歴史教科書は、稲作の伝来をはじめ、鉄製農具、土木、鍛冶、養蚕、機織、漢字、暦、儒教、仏教、須恵器などについて渡来した人々との関係を説明し、白村江、大野城、水城など、政治的経緯や関係を記述する。大和朝廷による統一国家の形成を国家の成立として説明し、アジアとの関係、韓半島から渡来した人々が国家形成に果たした役割をあげての記載もみえ、他にも、渡来した人々に関する日本の史跡について、詳しく説明する教科書もみえる（下線）。

『学習指導要領』や同解説では、中国との関係についてのみ指示されているのに対し、検定歴史教科書では、東アジア、とりわけ韓国との文化的交流を重視する傾向が顕著に見られ、天皇家に渡来系の親族の存在を指摘する記載（下線）や、渡来人の専門的能力をえて日本の国家形成が進められてきたという説明方法をとっている。他方、帰化の語を重視した教科書もみえる（下線）。

教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島の国々は、日本とも関係もち、すすんだ技術や文化を日本に伝えました。(13) ・紀元前4世紀ごろ、中国の長江流域や朝鮮半島の南部の人々が、九州北部にわたってきました。これらの人々は、水田での稲作をはじめ、新しい土器、金属器などの文化をもたらし、縄文時代の終わりごろの人々に伝えました。(15) ・弥生時代の人々は、朝鮮半島の人々と交流しましたが、紀元前2世紀に、漢が朝鮮北部に楽浪郡をおくと、中国とも交流をはじめ、そのようすが中国の歴史書に記されました。(19) ・日本の人々は、朝鮮南部と交流し、製鉄などの進んだ技術を受け入れていました。朝鮮と百済や新羅などの国ができると、大和政権は百済と同盟し、外交や戦争を通じて、朝鮮南部とも関係を深めました。5世紀に入ると、大和王権の大王は、中国に何度も使いを送り、中国の皇帝の権威をかりて、朝鮮北部の高句麗に対抗し、朝鮮との関係を保とうとしました。大陸との関係が深まると、朝鮮から日本に移り住む人々が増えました。これらの渡来人はおもに近畿地方に住み、大陸の優れた技術や、仏教・儒教などの思想を伝えました。渡来人はまた、漢字を使って記録をつくり、財政や政治などでも活躍しました。(21) ・「地名などに残る渡来人の足跡（高麗神社 埼玉県、東京都 狛江市）」朝鮮半島などから渡来した人々に関係のある寺社や、コマ・カラ・ハタ・クダラなどの地名が各地に残っています。(21) ・中央では、渡来人と結んだ蘇我氏が、朝廷の権力をにぎりました。(22) ・聖徳太子が建てた法隆寺には、さまざまな建築物や仏像、工芸品などが残されています。これらには、中国・朝鮮をはじめ、西アジア・ギリシアなどの文化の影響が認められます。(32)
清 水	<ul style="list-style-type: none"> ・イネも中国の南部や朝鮮半島から伝えられ、縄文時代後期には北部九州を中心に栽培されていた。(23) ・朝鮮半島や大陸から青銅や鉄の金属器も伝えられた。青銅器ははじめは銅剣や銅矛などの武器として使用されていたか、銅鐸とともに神に祭るための祭器としても使用されるようになった。鉄器は、武器やおのなどの工具・農具として利用されたが、まだ貴重品であった。(27) ・ヤマト王権は、朝鮮半島への進出をはかり、その正当性を認めてもらうために中国皇帝への使いを何度も送った。また、中国や朝鮮半島のすすんだ文化を積極的に取り入れ、倭に移り住んだ人々を重要な役職に用いた。こうした渡来人の中には大王家と婚姻関係をむすぶ一族もあった。(35) ・渡来人は、用水路や古墳をつくる土木技術、鉄製品をつくる鍛冶、かたい質の土器（須恵器）や機織りの技術を伝えた。また漢字や儒教が伝えられ、6世紀のなかごろには、百済の王から仏教も伝えられた。これらの文化は、その後の日本の宗教や文化に大きな影響を与えた。(35) ・蘇我氏はそのころヤマト王権の財政や外交を担当し、渡来人やその子孫を重要な役に用い、大王（天皇）の親戚になることで勢力を強めていった。(36) ・「広隆寺の弥勒菩薩像」材質は赤松で朝鮮と深い関係があるといわれている。(37) ・太子は、仏教を深く信仰し法隆寺を建てた。この法隆寺は、いまに残る世界最古の木造建築で、釈迦三尊像や玉虫厨子などが納められている。これらの文化は、朝鮮半島からの渡来人の人々が伝えたものが多く、その中心が飛鳥地方にあったので、飛鳥文化とよばれている。(37)
大 書	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島では、紀元前1000年ごろから農耕が盛んになり、南部では稲作が広まりました。青銅器や、やがて鉄器も使われるようになりました。紀元前2世紀の末、漢が朝鮮半島を攻めて楽浪郡などをおきましたが、後には北に高句麗、南にはいくつもの小国がおこりました。青銅器や鉄器、漢字や仏教

	<p>などを発展させた朝鮮の技術や文化は日本にも大きな影響をあたえました。(15)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・稲作は、中国の長江流域や朝鮮半島南部などから伝わってきたと考えられています。(20) ・百済と新羅にはさまれた伽耶(加羅, 任那)地方の小さな国々は、大和王権とのつながりを利用して両国に対抗しました。朝鮮や中国の記録には、4世紀ごろから倭が朝鮮半島の国々と交渉をもったことや、5世紀には倭王から5代にわたって中国に使いを送ったことなどが見られます。そしてこういう機会に、朝鮮から日本に大量の鉄がもたらされました。また、中国や朝鮮の人々が一族でまとまって日本に移り住むことも増えました。これらの人々を渡来人といいます。渡来人は日本の各地に住んで、土木建築、馬具や金属加工、高級な絹織物、高温で焼いた質のかたい土器(須恵器)をつくる技術や漢字・儒教・仏教などを伝え、日本の技術や文化に大きな影響をあたえました。(25) ・豪族の蘇我氏が渡来人と強い結びつきをもち、力を伸ばしました。(27) ・寺院や仏像・工芸品には朝鮮からの渡来人によってつくられたものが多く、また、ギリシャ文化とのつながりを示すものもあって、飛鳥文化が日本国内だけでなく、世界とのつながりをもっていたことがわかります。(32) ・「正倉院の宝物 紺瑠璃杯と新羅のガラス製杯」瑠璃とはガラスのことで紺瑠璃杯は西アジアでつくられたものと考えられています。正倉院のものと新羅のものに共通したデザインが見られます。(34) ・「地域に残る渡来人の足跡, 特質」わたしたちの地域に百済寺跡史跡公園や百済王神社があります。これらは、奈良時代に百済敬福が建立したものとされ、敬福の先祖は、7世紀に渡来した百済の王と伝えられています。わたしたちは、地域の渡来人の足跡をさらに知りたくなり、図書館などを利用して調べてみました。(42) ・「百済寺跡史跡公園と百済王神社(大阪府枚方市)」(42) ・大阪府の地名辞典を見ると、朝鮮半島の古い国名を用いた百済郷・百済村などの説明が書かれています。次に地図を見てみることにしました。すると、現在の地図でも、日本最大の貨物駅といわれる「百済貨物駅」や百済橋、百済がなまったといわれる杭全神社などを見つけることができました。また、古い地図では、新羅池という池や、今の心齋橋が新羅橋となっているものもありました。次に大阪の遺跡について、遺跡の分布図で調べてみると、大阪府南部に広がる泉北丘陵には陶邑とよばれた古い窯跡群があります。朝鮮半島から伝わった焼き物である須恵器の生産は、5世紀の初めにこの地で盛んに行われました。このことは千里丘陵付近でもみられ、大阪の南部(河内)と北部(摂津)の窯で焼かれた須恵器は、各地に供給されたそうです。さらに、河内には、牛を飼い、馬具を製作する渡来人や、絵描き、高級織物技術の渡来人集団などが住み着いたと思われる遺跡や地名が残されています。このように現在の私達の身近な地域からも、そのころの渡来人が多く技術や文化を伝えてきたことや、その当時の人々に大きな影響を与えていたということがわかってきました。(42) ・大阪府に渡来人の足跡が多いのは、難波津といわれ、高句麗・百済・新羅の使節を迎える外交館舎が設けられるなど、大阪が早くから朝鮮半島との交流の窓口となっていたからだそうです。このような渡来人の足跡が、大阪以外の他の地域にもないか、調べることにしました。すると、このような渡来人の業績をものがたるあとは、大阪府だけでなく、奈良県・滋賀県・埼玉県など、各地に残されていることがわかりました。そして、地名や寺社以外にも、舞楽などの伝統芸能や、言い伝えなどが残っているところがあることもわかりました。(43) ・「舞楽(巖島神社)」高句麗などから伝えられ、渡来人たちによって演じられていた舞楽は、奈良・平安時代を通して宮廷の儀式に欠かせないものとなりました。(43) ・「渡来人にかかわる主な遺跡」大野城、玉作湯(韓国伊太氏)神社、揖夜(韓国伊太氏)神社、許麻神社、百済王神社、新羅神社、石塔寺、百済寺、陶邑古窯跡群、高来(高麗)神社。(43)
帝国	<ul style="list-style-type: none"> ・主に朝鮮半島から技術者を招き、鉄製品の生産や馬の飼育などの新しい産業を興しました。(30) ・豪族は朝鮮反応の技術を進んで導入しました。多くの渡来人がこの地にやってくる、馬の飼育や金属の加工、治水技術などを伝えました。これらはやがて定着し、地域の生産力を高めるのに役立ちました。(31) ・「朝鮮半島の技術でつくられた土器と墓」これらのものは、ここに渡来人がいたことを証明しています。墓は石だけを積み上げたものです。金めつきをした靴なども出土しました。(31) ・高句麗と対立していた隋は、倭国(日本)との関係を重く見て、その願いを認めました。その後、政治や仏教を学ぶために、多くの留学生や留学僧が隋に渡りました。(32) ・渡来人は、土器や鉄器の製造や機織など、毎日の生活に役立つ多くの技術を伝えました。さらに、漢字を用いる渡来人は、記録や、中国や朝鮮半島の国々への手紙を作成するなどヤマト王権のなかで、重要な仕事に携わりました。6世紀には、仏教や儒教を伝え、日本の人々の信仰や文化にも大きな影響を与えました。(32) ・「山高帽をかぶる人物埴輪(千葉県 姫塚古墳出土)」あごひげやズボンが朝鮮古来の衣装と似ているので、渡来人との関係も考えられています。(32)

	<ul style="list-style-type: none"> ・「桓武天皇737－806 京都に都を移した天皇」桓武天皇は、天智天皇の子孫で、<u>母親は渡来系の下級貴族の出身でした。</u>貴族たちの反発にもかかわらず、長岡京（現在の京都市長岡京市）、ついで平安京へ都を移しました。(40) ・日本には、6世紀に、百済から仏教や経典が伝わりました。自然の神を信仰し、素朴な来世の世界を信じていた人々は、現世利益や来世についての体系的な教えに驚き、抵抗する人々もいました。(32) ・東大寺の正倉院に伝わる美術工芸品には、中国や朝鮮半島の国々だけでなく、遠くシルクロードの先、インドや中東、さらにはギリシャの影響がみられます。(42)
東 書	<ul style="list-style-type: none"> ・紀元前4世紀ごろ、大陸（おもに朝鮮半島）から渡来した人々によって、稲作が九州北部に伝えられ、やがて東日本にまで広まりました。(19) ・中国や朝鮮では、親への考を重視し、戦国時代以降の日本では主君への忠義が大切とされました。(20) ・縄文文化の終わりごろ、中国や朝鮮半島などから北九州へ渡来した人々が稲作を伝え、稲作は西日本から東日本へと広まっていきました。このとき渡来した人々と縄文人が少しずつまじり合うことによって、のちの日本人や文化のもてができました。(25) ・朝鮮の諸国との交流がさかになると、朝鮮半島から日本列島に、一族でまとまって移り住む人々が増えました。こうした渡来人は、鉄製の農具を広め、かんがい用の大きなため池をつくる技術を伝えました。渡来人はまた、漢字を伝えて、朝廷の記録や外国への手紙の作成にあたるなど、財政や政治でも活躍しました。漢字とともに、儒学の書物も伝えられました。6世紀半ばに仏教を日本に伝えたのも渡来人でした。(27) ・「日本の古墳から出土した鉄ののべ棒」加羅（任那）地方から輸入されたと考えられています。(27) ・「須恵器とのぼりかま」渡来人が伝えた新しいかまは、高い温度が出たので、かたい質の土器ができました。(27) ・当時の日本列島には、製鉄技術はまだなく、鉄は延べ板のような原料の形で朝鮮半島からもたらされていました。(28) ・6世紀の中ばに、仏像や経典が百済から朝廷におくられ、仏教が伝えられました。それまで自然神を信じ、素朴な死後の世界を思い描いていた人々は、体系的で、壮大な仏教の教えに圧倒されました。聖徳太子や蘇我氏は、仏教を広めようとしたので、都のあった飛鳥地方（奈良盆地南部）を中心に、仏教をもとにした文化が栄えました。これを飛鳥文化といい、法隆寺の建築や、その中にある釈迦三尊像などの仏像がその代表です。それらは、おもに朝鮮半島からの渡来人の子孫によって作られましたが、南北朝時代の中国や、さらに遠くインドや西アジアなどの文化の影響も受けています。(38)
日 文	<ul style="list-style-type: none"> ・大和政権は、鉄や、大陸のすぐれた技術を求めて、朝鮮半島の南部にも勢力をのぼす。5世紀には、大王は、朝鮮半島の南部を支配する地位を中国に認めてもらおうとした。大陸との往来がさかになると日本に移り住んでくる人々が増えた。朝鮮や豪族はこれらの渡来人を手厚くむかえ、進んだ文化を取り入れようとした。その結果、土木や鍛冶、養蚕や機織り、土器づくりなどの新しい技術が伝えられ、漢字や暦、儒教・仏教などの知識がもたらされ、生活の向上と文化の発展に大きな役割を果たした。(17)
日 書	<ul style="list-style-type: none"> ・倭国と朝鮮や中国との往来がさかになると、倭国に移り住んでくる朝鮮や中国の人（渡来人）がふえた<9世紀に、畿内に住む氏の祖先を調べた記録によれば、約30%が渡来系の氏であった>。倭の大王を中心とする朝廷は、渡来人をおもに近畿地方に住まわせて、大和政権につかえさせた。これらの渡来人は、ため池などの新しい土木技術や、かたい質の土器（須恵器）づくりや鍛冶・養蚕・機織りの技術を伝えた。そのため、農業・工業が発展し、大和政権の力が強まった。また6世紀の半ばに、百済から仏教の経典や仏像などが伝えられた。仏教は儒教とともに、のちの人々の信仰や文化に大きな影響を与えた。(36～37) ・母が渡来系の子孫である桓武天皇は、山城国の長岡（京都府）に都をつくり、ゆらいできた律令政治を立て直そうとした。(46)
扶 桑	<ul style="list-style-type: none"> ・5世紀から6世紀にかけて、大和朝廷が朝鮮半島の政治に積極的に関与した結果、朝鮮半島を通じて、中国の進んだ文化が日本にもたらされた。中国や朝鮮半島から一族や集団で日本に移り住んだ<u>埴化人（渡来人）</u>は、土器や金属の加工、土木建築などの技術を伝え、漢字による朝廷の文書の作成にも力を発揮した。漢字使用の定着とともに、儒教の書物も伝えられた。また6世紀には、百済の王が日本の支援を求めたさい。仏像と経典を大和朝廷に献上し、仏教が日本に伝来した。(33) ・蘇我氏は、<u>埴化人</u>を味方につけていた。(34) ・（大仏開眼）日本古来の舞だけでなく、唐・朝鮮。東南アジアの舞も加わった。(51)

5. 元寇に関する記述

韓国の教育課程では、「高麗は、モンゴルと講和した後、日本遠征への協力を強要させられ、また一部の領土が喪失され、内政干渉を受けるようになったことを理解する」と記され、高麗の日本遠征への参加は、モンゴル侵略の被害の一つとして位置付けられ、「国難克服史」の観点から説明されている。そのために、高麗がどのように勇敢に戦ったのか、元の内政干渉をどのように克服して自主性を回復したのか等が重視され、高麗が元と共に日本へ侵略した経緯や影響などについては、ほとんど記されていない。

日本の検定歴史教科書は、元寇を元軍と高麗軍の来襲として説明し、下記のように、三別抄、ベトナム、琉球、サハリン等、東アジアの中で説明するものもみえる。

教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・元は朝鮮半島にも侵入しました。そこでは、10世紀初めに建国された高麗がはげしく抵抗し、30年以上も戦いがつづきましたが、ついには元に服従させられました。(46) ・元は、1274年、服従しようとする日本に遠征軍を派遣しました。元と高麗の連合軍は、対馬・壱岐をおそい、さらに九州沿岸に上陸し、火器を武器とする元軍と、九州の御家人を中心とする幕府軍との間では、はげしい戦いが行われました。(47) ・高麗は仏教を保護し、印刷された経典が日本にもたらされました。また、光沢のあるすぐれた陶器がつくられました。 ・高麗で三別抄と呼ばれる軍が3年にわたって反乱を起こしたため、元の日本遠征はおくれました。(46)
清 水	<ul style="list-style-type: none"> ・チンギス=ハンの孫のフビライ=ハンは、元を建国して、根強く抵抗する朝鮮半島の高麗を30年近く攻めて従えた。(66) ・フビライは、日本も従えようとして、皇帝の国書を高麗の使者にもたせたが、執権北条時宗はこれを無視し、御家人に九州の守りをかためさせた。朝鮮では、高麗軍の一部が民衆の支持をえて元軍の支配に抵抗した。そのために元の日本遠征は遅れた。1274(文永11)年、高麗軍を従えた元軍が対馬などをへて北九州に攻め寄せた。幕府軍は、元軍の集団戦法や火器に苦しめられたが、元軍は博多湾から上陸した夜に暴風雨に襲われて引きあげた(文永の役)。幕府は、次の襲撃にそなえて、博多湾に石塁を築かせ元軍の上陸をはばんだ。元軍は、高麗軍や江南軍の寄せ集めでまとまりがなく、暴風雨が吹き荒れて船がほとんど沈んだこともあって、ふたたび引き上げた(弘安の役)。この2度の元の襲来を元寇という。(67) ・元は3度目の日本への襲来を計画したが、中国南部の漢民族の反乱や高麗・ベトナム・琉球・サハリンなどの人々の元に対する抵抗で延期し、フビライの死によって中止した。(67)
大 書	<ul style="list-style-type: none"> ・高麗は、モンゴル軍の侵入を受け、30年にわたり抵抗を続けましたが、ついに元に服従させられました。フビライは、高麗を仲立ちにして日本に使者を送り、武力を背景に国交をせまりましたが、幕府の執権北条時宗は、要求を退け、西日本の御家人に防備を命じました。1274(文永11)年、元は高麗に軍船や兵を出させ、約3万数千の軍で、対馬・壱岐をへて博多湾(福岡県)に上陸しました。幕府軍は、元軍の集団戦法や火薬に苦戦しながらはげしく戦い、その後、元軍は引きあげました(文永の役)。(58) ・1281(弘安4)年、元は降服した宋や、高麗の兵を加えた約14万の大軍で、再び九州北部に攻めよせました。幕府軍は、博多湾沿いに築いた石築地を利用して元軍の上陸をはばみました。元軍は、上陸できないまま海上ですごすうちに暴風雨におそわれ、大きな被害を受けてしりぞきました(弘安の役)。この2度にわたる元軍の襲来を、元寇といいます。(59) ・元は、3度目の日本侵攻を計画しました。しかし、中国・高麗・ベトナムなどの元に対する抵抗や、モンゴル帝国内の内乱のため延期し、フビライの死により中止されました。(59)
帝 国	<ul style="list-style-type: none"> ・元は周辺のアジア諸国も支配しようとする軍を進めましたが、高麗は30年にわたり抵抗を続け、大越(ベトナム)も粘り強く抵抗しました。こうした抵抗が元軍の力をそぎ、日本への遠征を大幅に遅らせました。(60) ・元寇は、日本人に強い恐怖心をうつけました。その一方で、暴風雨は日本の神がおこしたものだと思っただ日本人の間には、日本を「神国」とし、元軍の一員として戦いを交えた高麗(朝鮮)のことを低く見る思想が強まっていきました。(61)

東書	<ul style="list-style-type: none"> ・フビライは日本を従えようと、たびたび使者を送ってきましたが、執権の北条時宗がこれを退けたため、高麗の軍勢をも合わせて攻め入ってきました。(58) ・高麗や中国南部、ベトナムで元に反抗する動きが強まっていました。(59)
日文	<ul style="list-style-type: none"> ・蒙古はモンゴル帝国のことで、チンギス＝ハンが建てた。北アジアの草原で暮らす遊牧民族の国であった。強力な騎馬軍団で、ユーラシア大陸を征服し、高麗を従属させる。(44) ・元軍の兵士の多くは、征服された宋や高麗の人々であったため、士気は高まらず団結もできなかった。そして暴風のため、元軍は大打撃を受けて引き揚げた。(44)
日書	<ul style="list-style-type: none"> ・フビライは高麗に侵入し、根強い抵抗にあいながらも、30年かけてこれを征服した。高麗には日本に援助を求めようとする勢力もあったが、これは実現しなかった。フビライはさらに東南アジアや日本にも遠征しようとした。1268年、元は高麗の王を仲立ちにして日本の屈服を求める国書を送ったが、幕府はこれを無視した。(71) ・1274(文永11)年、元は高麗軍を率いて約3万の軍隊で、北九州におしよせ、博多湾から上陸した。幕府は、執権北条時宗の指導のもとにむかえうったが、元軍の集団戦法や火薬を用いた攻撃に苦しんだ。しかし、夜になって突然暴風雨が元軍の船を襲ったため元軍はひきあげた(文永の役)。元はその後、中国南部の宋をほろぼして力を強め、1281(弘安4)年、朝鮮と中国本土の2方面から約14万の大軍でおしよせた。しかし元軍は、寄せ集めの軍隊であったのでまとまりがなく、幕府が築いた石塁の完成もあって、上陸できないままに、またも大暴風雨で打撃を受けてひきあげた(弘安の役)。(71) ・後にこの暴風雨を日本では「神風」と呼んだ。ベトナムやジャワを攻めた元の海軍も暴風で大きな被害を受けている。(71)
扶桑	<ul style="list-style-type: none"> ・元軍は、1274(文永11)年と、7年後の1281(弘安4)年の2回にわたって、大船団を仕立てて、日本をおそった。日本軍は、略奪と暴行の被害を受け、新規な兵器にも悩まされた。しかし、鎌倉武士は、これを国難として受けとめ、よく戦った。また、2回とも、元軍は、のちに「神風」とよばれた暴風雨におそわれ、敗退した。こうして日本は、独立を保つことができた。この2度にわたる元軍の襲来を、元寇という。(55)

6. 文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)に関する記述

韓国の中学校国史教育では、秀吉の朝鮮侵略について、後金の侵略と共に「両乱」として取り扱われ、両乱の克服に焦点が当てられ^{*7}、国史教科書では、壬辰・丁酉倭乱について、乱の始まりから終わりまでが詳しく記述されている。ここでは、倭乱の結果として、荒廃化された国土、人的被害、文化財の消失や略奪など朝鮮が受けた被害を詳しく述べ、日本については、朝鮮から文化財や先進文物が伝えられて、文化の発展に繋がるとの記述(下線)がなされている。

・中国大陸では女真族が再び立ち上がって力を養い、日本では豊臣秀吉が100年あまりにわたる戦国時代の混乱を收拾して統一国家をつくりあげた。秀吉は不平勢力の関心を外に向かわせ、自身の大陸進出の野望を成し遂げるため朝鮮を侵略しようとした。日本は西洋から入ってきた鳥銃で軍隊を武装させ、侵略の準備を徹底的に行なった。そして明を征服するのに道を借りるという口実を掲げて、20万人あまりの軍隊を出兵させた。これを壬辰倭乱という。(149)

・1592年4月、倭軍が釜山鎮と東萊城(トンネソン)に侵略してくると、鄭撥(チョンパル)と宋象賢(ソンサンヒョン)などが精一杯戦ったがくい止められず、城は陥落してしまった。その後、倭軍は三方に分かれて北に攻め込んだ。朝鮮政府は忠州(チュンジュ)に防衛線を張り、倭軍の北上をくい止めようとしたが、これもやはり失敗してしまった。倭軍が漢陽(ハニャン)近くに接近すると、宣祖(ソンジュ)は義州(ウィジュ)に非難した。倭軍は平壤(ピョンヤン)や咸鏡道地方(ハムギョンド)にまで北上して、韓半島全域を彼らの手中に入れようとした。(149)

・李舜臣が率いる朝鮮の水軍が亀甲船を先頭にして玉浦(オクポ)で初勝利を収め、ついで泗川(サチョン)、唐浦(タンポ)、閑山島(ハンサンド)沖など各地で勝利を収めた。朝鮮は水軍の活躍で制海権を握り、倭軍の補給路を遮断し、全羅道(チョルラド)の穀倉地帯と黄海(ファンヘ)湾を守ることができた。水軍が海戦で勝利したのと時を同じくして、全国各地で義兵が立ち上がって郷土を防衛し、祖国を救おうとした。(150)

・水軍が勝利を収め、義兵の活動が活発に展開されている頃、明の援軍まで到着して朝鮮は倭軍に反撃を加えるようになった。このとき金時敏(キムシミン)は晋州(チンジュ)で、槽標(クウォンニル)は幸州山城

<p>(ヘンジュサンソン) で大きな勝利をおさめた。(150)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慶尚道の海岸地方に追いつめられていた倭軍は戦列を整えるため休戦を提議した。しかし3年間も続いた和議交渉が失敗すると、倭軍は再び攻撃してきた(丁酉再乱[チョンユジェラン]) (150)。 ・壬辰年とは違い、今回は朝鮮軍も軍備をきちんと整え、明軍と協力して倭軍を容易に退けることができた。また、退役してきた李舜臣が再び起用されて鳴梁(ミョンニャン)で倭軍を撃破した。折しも秀吉が死亡し、戦況も不利になると、倭軍は撤収しはじめた。この時李舜臣は退却する倭軍を、露梁(ノリャン)で撃滅したが、敵の流れ弾にあたって壮絶に戦死した。こうして7年にわたった戦争は終わった。(151) ・7年間の戦争は朝鮮の勝利に終わり、日本の侵略の意図は挫折した。日本は朝鮮を光復させられず、領土も得られなかった。それにもかかわらず、この戦争で最大の被害を受けたのは朝鮮だった。全土が荒廃化して耕作地が戦争前に比べて3分の1以下に減少し、人口も大きく減った。戦争中に数多くの人々が日本の捕虜となり、一部はポルトガル商人によりヨーロッパなどに奴隷として売られたりした。(151) ・文化財の損失もひどく、景福宮、仏国寺(プルグクサ)、史庫(サゴ)などが燃えてしまい、活字、書籍、陶器、絵画など多くの文化財を日本に略奪された。(151) ・壬辰倭乱は朝鮮ばかりか、日本や中国にも大きな打撃を与えた。日本では政権が変わり、明も戦争によって国力が弱まり、結局満州の女真族に中国の支配権を与えることになった。しかし、朝鮮からいろいろな文化財や先進文物が日本に伝わり、日本の文化発展に寄与した。(152)
--

日本の検定歴史教科書は、各社とも戦いの様子を地図等で記しており、耳塚、昌徳宮の焼失、残虐行為、陶工について触れている。一部の教科書では、特に陶工に関する人物や焼き物の産地、陶工の数)、儒者の連行、活版印刷の伝来等に触れている。

教出	<ul style="list-style-type: none"> ・堺は、明・朝鮮・琉球などの貿易船が入り出りするようになって栄えました。領主はつぎつぎに替わりましたが、周囲に堀をめぐらせて、有力商人が自治をおこなう都市として成長しました。(77) ・明の征服を計画し、朝鮮に協力をことわられると、1592年、朝鮮に15万の兵を出しました。日本軍は、たちまち朝鮮の都を占領しましたが、民家の抵抗や李舜臣の率いる軍の反抗などでいきづまりました。日本軍は各地で敗戦を重ね、秀吉の死とともに兵を引きあげました。7年間もの戦争は朝鮮の土地を荒らし、日本の武士や民家は重い負担に苦しみました。このとき日本軍が朝鮮からつれてきた陶工によって、磁器がつくられるようになり、うばった書物によって、朱子学がいつそう広まりました。(79) ・「姜沆と藤原惺窩」姜沆は、朝鮮侵略のときに、日本につれてこられた学者でしたが、1600年に帰国することができ、多くの門人を教えました。いっぽう、藤原惺窩は、戦いがつづいて世の中が乱れていることに心を痛め、政治思想としての儒学を深く学ぼうとしていた僧でした。中国で儒教にふれようと、一人で中国を目指して失敗したほどでした。たまたま、日本につれてこられた姜沆と知り合い、3年間の親交をつうじて儒学の理解を深めました。惺窩は、後に、徳川家康にも講義しました。(79) ・「有田焼(佐賀県)」朝鮮の陶工によってはじめられた磁器です。(79) ・「耳塚(京都市)」秀吉は、朝鮮で手柄をあげた証拠として、人々の鼻や耳を日本に持ち帰らせました。この塚は、それらを埋葬したものです。(79) ・朝鮮の都が陥落したころから各地で民家が立ち上がり、日本軍と戦いました。これらの民家は義兵とよばれています。(79) ・「昌徳宮(大韓民国)」ソウルにあり、15世紀に朝鮮王朝の離宮として創建されました。豊臣秀吉による朝鮮侵略の時に、正宮の景福宮とともに焼失しましたが、1609年に再建され、約300年にわたり正宮としてつかわれました。(巻頭)
清水	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉は、全国の大名を従え、明への侵略をくわだてて、朝鮮にも服従してともに戦うことを求めた。これを朝鮮が拒否すると、1592(文禄元)年、秀吉は16万人の大軍を朝鮮におくった。日本軍は漢城(いまのソウル)から平壤へと進出し、明の国境近くまでせまったが、朝鮮各地の民家の抵抗、李舜臣の率いる水軍、明の援軍などによって苦戦し、休戦して退却した(文禄の役)。1597(慶長2)年、ふたたび秀吉は朝鮮を攻めたが、翌年、秀吉が病死したので、日本は兵を引き上げた(慶長の役)。この2度にわたる出兵で、大名や民家の受けた負担や打撃は大きく、豊臣氏の力は、急速に衰えていった。(99) ・7年間にわたる侵略を受けた朝鮮では、国土や文化財があらされ、産業を破壊され、一般民家を含む多くの人命がうばわれた。また、儒学者や陶工など2万人以上の朝鮮人が日本に連れてこられ、朝鮮のすずんだ儒学や陶磁器の技法が日本に伝えられた。なかでも陶磁器の技法は、後に萩焼(山口県)・有田焼(佐賀県)・薩摩焼(鹿児島県)など各地でさまざまな焼き物とに発達した。また、朝鮮に攻

	<p>め込んだ武将のなかには、この出兵に疑問をもつ者や朝鮮の文化に感銘を受け、朝鮮軍に味方した者もいた。(98-99)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「秀吉の朝鮮侵略地図」朝鮮ではこの2度の戦いを壬辰・丁酉倭乱とよぶ。(99) ・「朝鮮水軍の亀甲船」船体を鉄板でおおい、秀吉軍を苦しめた。写真は韓国士官学校にある復元模型。(99) ・「耳塚」秀吉は朝鮮での戦いのてがらを示すために、敵の遺体から耳や鼻を切り取っておくらせた。それを集めて供養した塚(京都市・方広寺)(99) ・「朝鮮陶工によってはじめられた陶磁器の産地」長崎・熊本・佐賀・福岡・山口・鹿児島(99)
大書	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉は、1592年、明を攻めるため、その道すじにあたる朝鮮に九州の大名を主力とする大軍を送りました。日本軍が、朝鮮国内の乱れもあって、まもなく首都の漢城(今のソウル)や各地の都市を占領しました。しかし、侵略に対抗する民家などが兵を組織して、各地で日本軍を苦しめるようになり、さらに明の援軍も加わりました。こうして戦争が長引いたので、日本軍は休戦し、兵の一部を残して引き上げました。ところが、明との調和の話し合いがまとまらず、秀吉は再び兵を送りました。しかし、苦戦が続き、秀吉の病死とともに全軍が引き上げました。2度にわたる戦いは、朝鮮の民家に多くの犠牲者を出し、田畑があれ、ききんが続きました。日本国内でも、武士や百姓が重い負担で苦しみ、大名の間での不和も表面化して、豊臣政権の没落を早めることになりました。(91) ・「蔚山城の戦い」日本軍がつくった城を、朝鮮軍が攻めているようすです。いまでも、当時の城の石垣など残っています。(91) ・「亀甲船」倭寇対策として考案され、のちに改良された軍船です。朝鮮の水軍(海軍)は日本の水軍を破り、日本軍の補給路を断ちました。(91) ・秀吉の朝鮮侵略のさい、朝鮮人の陶工が日本につれてこられました。これらの人々によって、有田(佐賀県)、萩(山口県)、薩摩(鹿児島県)などに技術が伝えられ優れた陶磁器がつくられるようになりました。(92) ・「有田焼」有田焼は、李参平をはじめとする朝鮮人の陶工によって始められました。佐賀県有田町では、毎年、李参平をまつる行事をもよおしています。(93)
帝国	<ul style="list-style-type: none"> ・全国統一をはたした秀吉は、さらに領土を広げるため、明を征服しようとして1592年、15万人の大軍でまず朝鮮へせめ入りしました。日本軍は、首都漢城(現在のソウル)など各地を占領しましたが、朝鮮民家による義勇軍や、李舜臣のひきいる水軍の抵抗が強く、明の援軍もあって行きづまり、講和を結んで引き上げました。1597年にふたたび出兵しまいたが、日本軍の苦戦が続き、秀吉の死によって、全軍が引き上げました。この侵略で、朝鮮各地は焼かれ、多くの日本軍の戦死者も多く、日本側にも大きな負担となりました。しかし、このとき、とらえられた朝鮮の儒学者が日本の学者に儒教を教え、連行された陶工によって陶磁器づくりが伝わるなど、その後の日本文化に大きな影響をあたえました。(97) ・「釜山城の戦い(『東萊府殉節図』)」小西行長の軍が釜山城を包囲し、攻撃しているところです。 ・「復元された亀甲船」表面を板でおおい防備を固め、竜頭から大砲を撃つことができました。(97) ・「耳塚(京都市)」日本軍は、てがらの規準が、敵の耳や鼻の数であったため、多くの朝鮮の人の耳や鼻を日本に送りました。秀吉は、塚を築き、僧侶500人を集めて供養を行いました。(97) ・諸大名は、朝鮮出兵で陶工たちを捕まえて、良質な陶工の産地につれていき、茶器などをつくらせました。(99) ・朝鮮半島から伝わった茶器などをつくらせました。(99) ・「朝鮮の陶工による焼き物のおもな産地」(萩焼, 上野焼, 唐津焼, 有田焼, 波佐見焼, 小代焼, 高田焼, 薩摩焼, 壺屋焼)(99)
東書	<ul style="list-style-type: none"> ・1592(文禄元)年には、明(中国)の征服をめざして、朝鮮に大軍を派遣しました。日本軍は、首都漢城(ソウル)を占領して朝鮮北部に進みますが、救援に来た明軍におしもどされました。また、各地で朝鮮の民家による義兵が抵抗運動を起こし、朝鮮南部では李舜臣の水軍が日本の水軍を破り、日本からの補給路をたちました。このため秀吉は、朝鮮南部に軍をおいたまま、明と講和交渉を始めますが、皇帝の国書の内容に不満をもち、ふたたび戦いをはじめました。日本軍は苦戦し、秀吉が病死すると、全軍引き上げが命じられました。7年にわたる戦いで、朝鮮では多くの人々が殺されたり、日本に連行されたりしました。日本の部誌や農民も重い負担に苦しみ、大名の間での不和も表面化し、豊臣氏没落の原因となりました。(87) ・有田焼は、江戸時代にヨーロッパに輸出され、日本を代表する焼き物となりました。その有田焼をはじめたのは、朝鮮に兵を出した大名が連れ帰った陶工たちでした。かれらによって、優れた技術が伝えられ、有田以外にも、のちに各地で名産となる磁器や陶器が生まれました。佐賀県有田町には「陶祖李参平」とたたえる石碑が建てられています。有田焼のように、朝鮮から連行された陶工によって始められた焼き物には、ほかにどのようなものがあるでしょうか。(87) ・「李舜臣」李舜臣は朝鮮を救った英雄として、現在も韓国の各地に像が建てられています。(87)

	<ul style="list-style-type: none"> ・「肥前名護屋城」秀吉は、朝鮮侵略のための拠点として肥前国（佐賀県）に名護屋城を築き、加藤清正、小西行長など多くの大名を派遣しました。名古屋城は、当時では、大阪城に次ぐ規模で、周辺には、徳川家康など諸大名の陣がつくられました。(87) ・この戦いとき、朝鮮からこれまでの日本の印刷技術とちがう、活字印刷術が伝えられたんだよ。(87)
日 文	<ul style="list-style-type: none"> ・全国の大名を従えた秀吉は、明を征服しようとし、まず朝鮮に二度にわたって大軍を送り、朝鮮や明の軍と戦った、しかし、朝鮮の人々の強い抵抗で苦戦が続き、秀吉の病死とともに全軍が引き揚げた。朝鮮の国土は荒れ、多くの人命が失われた。このとき優れた陶工らが日本に連れてこられ、陶磁器の技術を伝えた。(76) ・「李舜臣」水軍を率いて、日本の水軍を破った。朝鮮を救った英雄として、現在も各地に銅像が立てられている。(77) ・「唐津」センターの人は「唐津焼はおもに草木灰を使った釉（灰釉）を用い、模様のない無地のもの、模様のある唐津、白い長石釉をかけた朝鮮唐津などがあります。茶碗、茶入れ、水差しなど茶器がつくられたことも特徴です。」と教えてくれました。この地方で焼き物がつくられはじめたのは、室町時代だそうです。その後、安土桃山時代に茶の湯がさかんになったことから発展し、とくに豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、朝鮮半島から陶工が多くつれてこられ、多くの窯がつくられました。・・・唐津という地名は、「韓津」にちなんでつくられたといわれます。これは、朝鮮（韓）との交通の要地でもありました。(89) ・「有田焼」有田（佐賀県）の陶磁器は、朝鮮の陶工がはじめたという。(90)
日 書	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の勢力を外国にまでのぼせようと考えていた秀吉は、国内統一をなしとげると明の征服をくわだてた。秀吉は、1592年、その道筋にあたる朝鮮に諸大名の軍勢15万人あまりを侵入させた。秀吉軍はまもなく漢城（今のソウル）などを占領し、明の国境近くまで攻め込んだ。しかし、朝鮮の民衆が各地で立ち上がり（義兵）、やがて水軍の力も増してきた上に、明の援軍もあって、秀吉軍はおしもどされた。そこで秀吉は休戦し、講和についての話し合いに入った。しかし、講和が成立しなかったので、秀吉は再び戦争をはじめたが、苦戦がつづき、秀吉が病死したので、全軍がひきあげた。秀吉軍にしたがって朝鮮へわたることを命じられていた一人の僧は、日本軍の残虐なふるまいに出くわし、「野も山も焼きはらい、人を切り、人の首をしぼる。そのため、親は子どもを嘆き思い、こどもは親をさがし回るあわれな光景を見た」と日記に記した。(102) ・「耳塚」大名が手柄の証拠として朝鮮人から切り取り、秀吉のもとに送った鼻をうめて供養したものの。これが耳塚とよばれるようになったが、その理由はわかっていない。(102) ・茶の湯の流行にともない、湯のみなどの陶器が各地でつくられた。朝鮮侵略のとき、日本へつれてこられた朝鮮の陶工も有田焼（佐賀県）などをはじめた。(103) ・朝鮮侵略に失敗したため、豊臣氏の勢力はおとろえた。(104)
扶 桑	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉は、中国の明を征服し、天皇とともに大陸に移り住んで、東アジアからインドまでも支配しようという巨大な夢をもつにいたった。1592（文禄元）年、秀吉は、15万あまりの大軍を朝鮮に送った。加藤清正や小西行長など武将に率いられた秀吉の軍勢は、たちまち首都の漢城（現在のソウル）を落とし、朝鮮北部にまで進んだ。しかし朝鮮側の李舜臣が率いる水軍の活躍、民衆の抵抗、明の朝鮮への援軍などで、不利な戦いとなり、明との和平交渉のために兵を引いた（文禄の役）。しかし、明との交渉はととのわず、1597（慶長2）年、秀吉はふたたび約14万の大軍を派遣した。ところが、今度は朝鮮南部から先に進むことができず、翌年、秀吉が死去し、兵を引きあげた（慶長の役）。2度にわたって行われた出兵により朝鮮の国土や人々の生活は著しく荒廃した。この出兵に、莫大な費用と兵力をついやした豊臣家の支配はゆらいだ。(97) ・「有田焼」このころ、捕虜として日本につれてこられた朝鮮の陶工によって陶器の技術が伝えられ茶の湯の発展にもつながった。(97)

7. 朝鮮通信使に関する記述

韓国の国史教科書には、朝鮮通信使との交流が日本の文化発展に貢献したことが記述され、19世紀の初め頃に幕を閉じたことだけが記載されている。日本の外交使節は、ソウルまでこられず、通信使は江戸まで行った事実から、朝鮮側が優越な位置にあったとの印象を与える記述となっている。^{*8}

・倭乱後、日本は朝鮮に使者を送って交流することを何度も要請してきた。これに朝鮮は僧侶惟政を日本に派遣して朝鮮人捕虜を連れ帰った後、再び国交を結んだ。しかし、朝鮮は日本の使臣が都に入ることを禁じ、東

葉と倭館だけで仕事をさせ、帰国させた。これに比べ、朝鮮通信使は日本の江戸（東京）まで行って幕府の將軍に会うなど、活発な外交活動をくり広げた。(152)
 ・日本で通信使に対する反対の世論が広がり、200年あまりの間続いた通信使の派遣は、19世紀初めに幕を下ろした。(152)

日本の検定歴史教科書では、地図や絵、唐子踊りの写真等を使用して、通信使が日本国内で果たした役割が記述されている。雨森芳州などの存在に触れた教科書もみえる。

教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮や琉球は清に朝貢しましたが、日本は清との国交をもちませんでした。(88) ・朝鮮とは、対馬の宗氏が交流の約束を結び、釜山の倭館で貿易がおこなわれました。朝鮮は、日本の將軍の代替わりに通信使を派遣し、宗氏の案内で江戸に向かい各地でかんげいされました。通信使の宿所には、日本の知識人がおとずれて交流しました。(89) ・「岡山県瀬戸内牛窓の唐子おどり」朝鮮通信使の行列や交流の光景を、祭りやおどりの形にして今日まで伝える町もあらわれました。このおどりもその一つで、牛窓は通信使一行の寄港地でした。(89)
清 水	<ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮通信使来朝団」「鎖国」がおこなわれていた日本で、唯一正式な国交をもった国は朝鮮でした。多くの人々が見守るなか、通信使たちが江戸の街並みに行くようすが描かれています。(85) ・「いまに伝えられる朝鮮通信使の行列のようす。」通信使の一行はソウルから対馬をへて、瀬戸内海の淀川を船ですすみ、京都からの陸路で江戸にむかいました。岡山県瀬戸内市牛窓町や三重県津市などに、通信使を模した踊りが伝えられています。瀬戸内市牛窓町の唐子踊り。(85) ・家康は、秀吉の侵略で悪化した朝鮮との関係改善をはかった。(103) ・朝鮮との国交は家康の時に回復し、1607年以後、幕府の要請によって、たびたび朝鮮使節が来日した（朝鮮通信使）。朝鮮との外交は、対馬藩主の原氏が幕府の意向を受けておこなった。貿易も宗氏がおこない、米・木綿・薬用人参などが輸入された。(107) ・朝鮮との交渉をおこなった対馬藩で、その事務にあたったのが、雨森芳州でした。芳州は近江の人で、21歳のときに対馬藩によばれました。芳州は「相手の国の言葉が話せなくては親しい交流はできない」と朝鮮に渡って言葉を覚え、長崎では中国語を学びました。朝鮮との外交にあたっては、まず、相手の国の人情や風俗、社会のあり方を知り、また、お互いに欺かず、争わず、真実を持って交わる誠心の心を持つことが重要であると主張しました。芳州は1775年、87歳で対馬で没しました。(107)
大 書	<ul style="list-style-type: none"> ・秀吉の朝鮮侵略から後、朝鮮との国交は断絶してしまいましたが、対馬藩の仲立ちによって、家康の時に国交が回復しました。その後、將軍がかかわるごとに、朝鮮からは通信使と呼ばれる使節が江戸を訪れるようになりました。また、対馬藩は、毎年釜山に船を送って、朝鮮との貿易を行いました。朝鮮からは生糸や木綿・朝鮮人参を輸入し、日本からは銀や銅などを輸出しました。(99) ・「唐子踊り（岡山県瀬戸内市牛窓町）」朝鮮の服装に似た衣装をつけた子供が、太鼓や笛に合わせて踊る行事が残されています。(98) ・「通信使に書を求める人」通信使は、江戸時代に12回来日しました。通信使との交流は、幕府以外かたく禁じられていましたが、人々は通信使にたいへん関心を持ち、交流を求めました。(99)
帝 国	<ul style="list-style-type: none"> ・徳川家康は、豊臣秀吉の侵略によって関係が壊れた朝鮮に対し、対馬の宗氏に交渉を命じて、国交を回復しました。(104) ・対馬では、宗氏が幕府と朝鮮との国交回復の仲立ちをつとめました。そして、朝鮮通信使は、2代將軍徳川秀忠の時から將軍が関わるごとに就任祝いの外交使節として訪れ、計12回やってきました。400～500名の大使節団でやってくる朝鮮通信使の中には、優れた学者・医者もあり、日本の学者や文人との文化交流がはかられました。江戸時代の各地の祭りでは、朝鮮通信使をまねた唐人行列が好評で、毎年のように行われました。江戸時代の人々には、その行列や唐人人形などで、外国人の姿を知ったのです。(107) ・「雨森芳州1668－1755」朝鮮との架け橋となった儒学者、近江（滋賀県）の出身、対馬藩に仕え、独学で朝鮮語を習得し、朝鮮外交の担い手となりました。(107)
東 書	<ul style="list-style-type: none"> ・家康の時代に朝鮮と講和が結ばれ、將軍の代わりごとに400～500人の使節（通信使）がくる慣例となりました。対馬藩は、国交の実務を担当するとともに貿易を許され、朝鮮の釜山に設けられた倭館で、銀や銅などを輸出し、木綿や朝鮮人参、絹などを輸入しました。(97)
日 文	<ul style="list-style-type: none"> ・豊臣秀吉の侵略でとどえていた朝鮮とは、家康のときに国交を回復した。その交渉には対馬藩（長

	崎県)の宗氏があつた。宗氏は、幕府の命を受けて、朝鮮の釜山におかれた倭館で、外交・貿易を進めた。そして将軍がかわるまでに使節(朝鮮通信使)が江戸をおとずれた。(82)
日書	・家康は対馬の大名宗氏を仲立ちに、朝鮮との国交回復に成功し、対馬藩は毎年貿易船を送った。家光のときから、将軍がかわるごとに400人ほどの朝鮮の使節団(通信使)が来るようになった。(107)
扶桑	・幕府は家康のとき、対馬の宗氏を通じて、秀吉の出兵で断絶していた朝鮮との国交を回復した。両国は対等の関係を結び、朝鮮からは、将軍の代がわりのたびに朝鮮通信使とよばれる使節が江戸を訪れ、各地で歓迎されました。また、朝鮮の釜山には宗氏の倭館が設置され、約500人の日本人が住んで貿易や情報収集にたずさわった。(106)

8. 「開国」「江華島事件」に関する記述

韓国の国史教科書には、日本からの通商修好条約要求を拒否した点とその理由を記している。

・明治維新を通して新しい国家体制を整えた日本も通商修好を要求してきたが、その外交文書に日本国王(天皇)が朝鮮国王を見下す表現と従来の外交慣行に反する内容があったので、朝鮮政府はこれを拒否した。(196)

日本の検定教科書では、対馬藩による文書に反発して開国を拒んだ点が、数社で説明されている。また、このことに関連して日本国内に征韓論が起こったとする説明は、韓国の国史教科書には見られない。

教出	・1868年、対馬藩は、朝鮮に明治維新を知らせる文書を伝えました。その内容は、日本が朝鮮の上に立つものだったので、朝鮮は文書のうけとりを拒否しました。(120) ・日本政府内には、西郷隆盛、板垣退助らを中心に、武力を用いても、朝鮮に新たな外交関係を認めさせようとする主張(征韓論)が occurred。(120)
清水	・国交のつづいてきた朝鮮とは、王政復古を知らせて、新しい関係をむすぼうとした。しかし、朝鮮は、当時攘夷政策をとっていたことなどもあり、日本の新しい政府との交渉をこぼんだ。(152) ・朝鮮は、1866年にフランス軍艦、1871年にはアメリカ軍艦の攻撃をしりぞけて攘夷に自信をもった。また、1868年に日本政府が朝鮮におくった国書に無礼な文字があると受け取りを拒否していた。(153) ・王政復古のあと、国内の一部には、朝鮮に出兵して国のいきおいを占めようとする主張(征韓論)があったが、朝鮮の対応は、これにより口実をあたえることになった。征韓論は、廃藩置県や徴兵令などの改革とで地位をおびやかされていた士族に支持され、政府では、西郷隆盛や板垣退助がその代表であった。(153)
大書	・西郷隆盛らは、不満をもつ士族の関心を海外に向けさせるために、鎖国を続ける朝鮮に対して、武力に訴えてでも日本と国交を結ばせようとした(征韓論)。(144)
帝国	・新政府は、欧米諸国から学んだ外交のやり方を、アジアに対して行おうとしました。まず新政府は、朝鮮と国交を結ぼうとしましたが、朝鮮は江戸時代からの関係をそこうやり方だと考え、その要求に応じませんでした。(150) ・朝鮮は、従来の対馬藩を通じた外交方法を求め、また、対等な関係ではないことを示した日本からの国書に反発しました。(157) ・西郷隆盛や板垣退助らは、武力に訴えてでも朝鮮に要求を通そうとする征韓論を主張し、士族の不満の解消もめざそうとしました。(150)
東書	・中国に朝貢していた朝鮮は、欧米に対して鎖国し、また明治政府との国交もこぼんでいました。(149) ・政府内には武力で開国をせまる主張(征韓論)が高まり、1873年、いったん使節の派遣が決定されましたが、欧米から帰国した岩倉や大久保は国力の充実が先であるとして派遣を中止させました。(149) ・朝鮮の開国を求めるための使節派遣を強引に中止させたため、西郷隆盛ら5人の参議は辞職しました(明治六年の政変)。(150)

日 文	・政府は、朝鮮にも国交を開くことを求めたが、朝鮮は応じず、国内には征韓論がおこった。(118)
扶 桑	<p>・明治政府は、維新直後の1868年、新たに朝鮮と国交を結ぶため、使節を派遣した。しかし朝鮮は日本の同意した国書に不適切な文字が使われているとの理由で、外交関係を結ぶことを拒否した。明治政府は、朝鮮との外交では、はじめからつまずくこととなった。(151)</p> <p>・②日本の使節が持参した国書に日本の天皇を指す「皇」の文字が使われていたが、これは中国の皇帝以外に使ってはいけない文字とされていたので、朝鮮の王朝は受け入れることができなかった。(151)</p> <p>・国内では1873（明治6）年、日本の開国のすすめを拒絶してきた朝鮮の態度を無礼だとして、士族たちの間に、武力を背景に朝鮮に開国を迫る征韓論がわき起こった。廃藩で失業した士族たちは、徴兵令が施行されたので、武士の誇りを傷つけられたとして不満を高めていた。彼らの中には、朝鮮との戦いで自分たちの存在意義を示そうとする者もいた。(152)</p> <p>・西郷は自分が使節に行くことを強力に主張し、板垣退助・江藤新平など他の参議もこれに同意して、政府の決定をとりつけた。西郷自身は、戦争覚悟の交渉によって朝鮮に門戸を開かせようと考えていた。(153)</p>

9. 日朝修好条規（江華島条約）及び両国関係に関する記述

韓国の国史教科書には、雲揚号事件、江華島条約の不平等性、閔氏の台頭、日本への修信使派遣、壬午軍乱における日本公使館の破壊や天津条約、甲申政変とその後日本の経済的浸透等について記載されている。

日本の検定教科書では、武力・砲艦を背景とした日朝修好条規の強要、不平等条約であった事実が説明されるほか、日本では、日朝修好条規により征韓派の面目を失ったこと、条約締結後の朝鮮内での親日派と親中派の存在等の記述を加える教科書もみえる。

日朝修好条規以後の両国関係については、壬午事変（1882年）等（下線）について記述する教科書は一部にとどまる。

以下、3列にわたる表の場合左端は韓国の国史教科書に記載された記述と該当頁数である。

<p>・日本は朝鮮との交渉を積極的に要求してきた。明治維新を起こして新しい国家体制を整えた日本は、朝鮮に対する通商を強要するため雲揚号事件を引き起こした。この事件を口実に、日本は朝鮮に通商条約を結ぶことを強要した。これは西洋勢力が軍事力を先頭にしてアジアの国々に強要したやり方を見習ったものだ(199)</p> <p>・日本は江華島に軍艦を送って威嚇的な行動を行動をとり、会談を開こうとした。朝鮮政府は日本の行為を野蛮で侵略的なものと非難しつつ、彼らとの対話を拒否した。しかし朝鮮の一部の役人は西洋の科学技術が必要であることを早くからわかっていた。したがって日本と通商をして西洋の文物を受け入れるべきだという主張もあった。このような内外の状況の中で江華島に両国の代表が集まって条約を結ぶが、これが江華島条約である(1876年)。(199)</p> <p>・江華島条約はわが国が外国との間で結</p>	教出	<p>・1875年の江華島事件をきっかけに、翌年、日本は軍艦を率いて使節を朝鮮に送って圧力をかけ、日朝修好条規を結んで開国させました。この条約は日本にとって有利な条約でした。(120)</p> <p>・日本の軍艦が、ソウルに近い江華島に近づいて測量したため、朝鮮の砲台から攻撃され、日本側が反撃してこれを占領した事件です。(121)</p> <p>・朝鮮に勢力を広げようとした日本は、朝鮮への支配を強めようとする清と対立を強めました。朝鮮は、日本をけん制しようとする清のすすめで、欧米諸国とも外交関係を結びました。朝鮮でも近代化の努力がはじまりましたが、日本と清の干渉によって、十分な成果が上がりませんでした。そのようななか、朝鮮では政治の腐敗がすすみ、人々の生活は苦しくなっていました。(127)</p>
	清水	<p>・政府は、1876年、攘夷政策をゆるめかけていた朝鮮に強硬な態度でせまり、日朝修好条規をむすんだ。これは幕末に欧米が日本に結ばせた条約とおなじく、朝鮮にとって不平等な条約であったが、日本の国内では征韓論が名目を失うことになった。(153)</p> <p>・「朝鮮との交渉」1875年、日本は朝鮮の江華島付近に、測量の名目で軍艦をおくった。このとき、交戦事件があったのをきっかけに、朝鮮に条約交渉をせまり、1876年に日</p>

<p>んだ最初の近代的条約で、いくつかの重要な意味を持っている。この条約によって朝鮮は釜山、元山（ウォンサン）、濟物浦（チェムルポ）の地域に日本人が居住できることを認めた。江華島条約では朝鮮が自主国家であることを明らかにしたが、朝鮮に不利な規定が含まれていた。日本が朝鮮の海岸を自由に測量することを認め、治外法権を認めて、日本人が朝鮮に来て日本法によって保護を受けられるようにしたことなどが、不公平な内容の代表的な例である。(200)</p> <p>・江華島条約が締結された後、朝鮮政府は開化政策をおし進めた。これによって金綺秀（キムギス）と金弘集（キムホンジブ）が日本を修信使として訪れ、日本の発展した姿を国王に報告した。ついで政府は、若い役人を日本に派遣して、いくつかの政府機関と産業施設、文化などを視察させた。彼らは帰国後それぞれ旅行記と視察報告書を作成して国王に提出した。これは政府の開化政策推進に役立った。(201)</p> <p>・政府は開化政策を主管するために統理機構衛門（トンニギムアン）を設置し、別枝軍（ピョルギン）という新式軍隊を組織して日本から入ってきた新しい武器で訓練させた。(201)</p> <p>・日本と江華島条約を締結した後、より積極的に開化政策をおし進めて国を発展させようという主張をする人たちがいたが、彼らは開化派という。しかし多くの儒生たちは西洋諸国と日本を野蛮人と考え、彼らと接触することに反対し、わが国固有の儒教文化と秩序を守らなければならぬとする衛生斥邪運動を起した。このように政府の開化政策が実施される過程で、開化論と斥邪論が対立するようになった。そしてここに閔（ミン）氏勢力と興宣大院君勢力の争い、日本勢力の浸透に対する国民の反発などが絡み合っ</p>	<p>朝修好条規がむすばれた。この図は日本の使節が、軍隊を率いて交渉会場におもむくところ。（「朝鮮国真景」）(153)</p> <p>・明治政府は朝鮮に日本とおなじように中国から独立し、欧米風の改革をして、世界とひろく交際するよう要求していった。日朝修好条規が結ばれたあと、日本と朝鮮は、貿易をはじめた。また朝鮮は清と日本に使節をおくり、開化への道をさぐりはじめた。東京に公使館を開いていた清の外交官は、このようすをみて、日本にきた朝鮮使節に、清と親しみを深めつつ、日本との友好につとめ、欧米とはま</p> <p>・1882年にはアメリカと修好通商条約をむすんだ。ところが、この年、朝鮮では旧式の軍隊が保守派とむすんで反乱をおこした。清は軍隊をおくってこれをしずめ、開化政策を支えた。(165)</p> <p>・日本に留学して急進的な改革をめざすようになった人びとは、1884年、日本の援助を期待してクーデタをおこしたが、やはり清の軍隊におさえられた。この事件で日本と清の関係はけわしくなったが、翌年両方の軍隊を朝鮮から引きあげて、関係をやわらげた。清はその後、有力な政治家を朝鮮におくり、内政に強く干渉するようになった。当時の日本は清にくらべて軍事的に弱かったので、日本政府は朝鮮への介入をひかえるようになった。(165)</p>
<p>・開化政策がおし進められる中、旧式軍人たちは、新式軍隊である別枝軍に比べて相対的に低い待遇を受けていた。一時滞っていた給料に砂と糠の混ざった米を受け取らされると、旧式軍人たちの不満は一気に爆発した。彼らは普段から憎んでいた政府の高官を殺し、日本公使館に火をつけ、別枝軍の日本人軍事教官を殺害した。これを壬午軍乱という(1882)。(202)</p> <p>・朝鮮政府は日本の強い圧力で、濟物浦条約を結び、壬午軍乱中の日本側の被害に対する賠償金を支払い、さらに日本公使館の経費（警備）を口実に、日本軍が</p>	<p>大書</p> <p>・1875年、政府は朝鮮に軍艦を派遣し、無断で沿岸を測量するなどの圧力をかけたので、江華島砲台とのあいだに砲撃戦が起りました（江華島事件）。これを理由に、翌年、治外法権などを含む日朝修好条規を朝鮮に認めさせ、釜山などの3港を開港させて、貿易を始めました。(144)</p> <p>・日本と日朝修好条規を結んだ朝鮮政府は、その後、開化政策へと転換していきました。しかし、開化政策に反対する勢力も強く、さらに日本と清が政治に干渉したこともあって、朝鮮国内は不安定でした。そのうえ、朝鮮政府が、財政赤字を補うために税を重くしたので、民衆の反発が強まりました。(156)</p> <p>・①日本の明治維新にならって、近代化を進め、外国の支配に服さない自衛力のある近代国家をめざしました。(156)</p>
<p>・日朝修好条規が結ばれたのち、朝鮮から視察団が日本にやってきました。西洋文化を取り入れた日本の工場・軍隊・新聞などを見学し、朝鮮の近代化をはかるためです。しかし、当時の朝鮮では、儒教思想が根強く、西洋文化への反発がありました。また、甲午農民戦争や日清戦争による混乱があり、使節団は成果をあげられませんでした。(171)</p>	<p>帝国</p> <p>・朝鮮の江華島沖で、日本の軍艦が朝鮮に無断で測量したため砲撃される事件がおきました（江華島事件）。この事件を口実として、新政府は、朝鮮に不平等な条約である日朝修好条規を結ばせ、港を開かせました。(157)</p> <p>・日朝修好条規が結ばれたのち、朝鮮から視察団が日本にやってきました。西洋文化を取り入れた日本の工場・軍隊・新聞などを見学し、朝鮮の近代化をはかるためです。しかし、当時の朝鮮では、儒教思想が根強く、西洋文化への反発がありました。また、甲午農民戦争や日清戦争による混乱があり、使節団は成果をあげられませんでした。(171)</p>
<p>・日本は、朝鮮に韓国を求める交渉を進め、1875年の江華島事件をきっかけに、翌年、朝鮮を独立国と認めた条約（日朝修好条規）を結び、朝鮮を開国させました。しかし、その内容は不平等条項を押しつけたものでした。日本が朝鮮、中国と結んだ条約は、近代国際法にもとづく欧米型の外交関係をアジアにもちこんだもので、中国を中心としたアジアの伝統的な国際秩序と対立し、日本と中国は朝鮮に対する主導権をめくり対立を深めていきました。(149)</p> <p>・②軍艦を朝鮮に派遣し、沿岸を無断で測量して圧力を加</p>	<p>東書</p> <p>・日本は、朝鮮に韓国を求める交渉を進め、1875年の江華島事件をきっかけに、翌年、朝鮮を独立国と認めた条約（日朝修好条規）を結び、朝鮮を開国させました。しかし、その内容は不平等条項を押しつけたものでした。日本が朝鮮、中国と結んだ条約は、近代国際法にもとづく欧米型の外交関係をアジアにもちこんだもので、中国を中心としたアジアの伝統的な国際秩序と対立し、日本と中国は朝鮮に対する主導権をめくり対立を深めていきました。(149)</p> <p>・②軍艦を朝鮮に派遣し、沿岸を無断で測量して圧力を加</p>

<p>ソウルに駐屯することを許した。済物浦条約後、朴泳孝（パクヨンヒョ）が日本に使節として派遣されたが、このとき太極旗（テグッキ）が初めて使用された。(202)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・閔氏勢力は開化政策に消極的だったので近代的な改革がきちんと進行しなかった。このような状況は日本の明治維新を見習って近代国家をつくらうとする開化派勢力にとっては不満であった。これに金玉均（キムオッキン）、朴泳孝、徐光範（ソグヴァンボム）、洪英植（ホンヨンシク）など開化等の人物たちが郵政局開局の祝宴を利用して政変を起こした。これを甲申（カプシン）政変という（1884）。(203) ・しかし政変は清軍の介入により3日で失敗に終わり、金玉均、朴泳孝などは日本に亡命した。(203) ・甲申事変が失敗した理由は、開化思想が国民の間に広がられなかったので民衆の支持を得られず、また改革が日本の力を借りた政変の形をとっておし進められたので、国民の反発をかったからだった。そればかりか、日本軍より数のうえで優勢だった清軍が介入したことも失敗した理由の一つだった。(204) ・開化党政権が3日で崩れ、高宗（コジョン）は新内閣を通して各種改革の措置を無効とし、礼曹参判を日本に派遣して日本の政変介入に抗議し、金玉均など亡命者の送還を要求した。しかし日本は公使館が焼かれ、公使館職員が犠牲になったことについて逆に謝罪と賠償を要求し、武力示威を行った。これに対して、政府は漢城（ハンソン）条約を結び、謝罪とともに賠償金を支払った。(204) ・甲申政変の失敗によって清に比べて政治的に不利となった日本は、清と談判して天津条約を結び、朝鮮から清日両国軍を撤収させ、将来軍隊を派兵する場合には互いに知らせることを約束した。甲申事変以後も、清の朝鮮に対する内政干渉は相変わらず激しかった。清日両国は互いに朝鮮に対する経済的浸透を強化し、競争し、10年後には清日戦争が起きることとなった。(204) ・甲申政変によって朝鮮で政治的な影響力を失った日本は、経済的浸透をさらに強化した。(207) ・日本の経済的浸透に対抗して一部の地方では防穀令によって損害を受けるようになったとして、朝鮮政府に賠償を強要し、政府はこれに屈服してさらに多くの被害を被った。(208) ・日本の経済的浸透は、農民の生活をさらに苦しくし、農民の間には日本を排斥する機運が高まった。(208) 	<p>えたことによって起きた武力衝突。(149)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮では、日朝修好条規を結んだ日本と、朝鮮の支配権を主張する清とが、勢力争いをくり広げていました。朝鮮国内では、明治維新にならって近代化をはかろうとする親日派と、清との関係を維持して欧米に対抗していこうとする親中派が激しく対立しました。(155) ・1884年におきた政変以後、清の影響力が強くなると、日本は、欧米のアジア侵略が強まるなか、朝鮮に進出しなければ、日本の前途もあぶないとし、清に対抗するため軍備の増強をはかっていきました。(155) ・①親日派が日本と結んで、武力で政治の実権をにぎろうとしましたが、清に破れ、日本の影響力は大きく後退しました。(155)
<p>（この欄は上記の日本語本文と重複する内容を省略し、表の構造を維持するため空白としています）</p>	<p>日文</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1875年、日本の軍艦が漢城（今のソウル）近くの沿岸で演習や測量をして砲撃を受けると（江華島事件）、政府はこれを口実に強い態度で交渉し、翌年、日朝修好条規を結び、国交を再開させた。この条約は朝鮮にとって不平等なものであった。(118) ・日本は明治維新以来、アジアの大国になることをめざし、朝鮮を開国させ、朝鮮の支配をめぐり、清と対立した。朝鮮では、近代化をめぐり、王室内で、清国派と日本派が対立していて、政治が混乱し、農民は重税に苦しんでいた。(136)
<p>（この欄は上記の日本語本文と重複する内容を省略し、表の構造を維持するため空白としています）</p>	<p>日書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は朝鮮で江華島事件をひきおこし、これをきっかけに朝鮮に圧力を加えて、日本が欧米諸国におしつけられたのと同じような不平等条約を朝鮮に結ばせた（日朝修好条規）。(147) ・朝鮮の江華島付近で測量するなど、日本の軍艦が朝鮮側の攻撃をさそう行動をとったため朝鮮軍に砲撃され、日本側がこれに応戦した事件。(147) ・日本は朝鮮に不平等条約をおしつけたのち、有利な条件を生かしてしだいに朝鮮に勢力をのぼしていった。これに対し、朝鮮では反発が強まった。日本は朝鮮の宮廷のなかの対立を利用して、日本にたよろうとする勢力と手を結び、清の勢力をのぞこうとしたが失敗し、清との対立を深めた。(159)
<p>（この欄は上記の日本語本文と重複する内容を省略し、表の構造を維持するため空白としています）</p>	<p>扶桑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①日本は、1875年、朝鮮の江華島沖に軍艦を派遣し、無断で周辺の沿岸を測量するなどの圧力をかけたので、軍艦が砲撃され交戦する事件がおきた（江華島事件）。これを理由に、日本は、翌76年、日朝修好条規を結び、朝鮮を開国させた。これは朝鮮にとって不平等な条約だった。(153) ・日本は朝鮮の開国後、その近代化を助けるべく軍隊の制度の改革を援助した。ところが、1882（明治15）年、改革に取り残され、冷遇されたことに不満をもった一部の朝鮮軍人の暴動が発生した（壬午事変）。清はこれに乗じ、数千の軍隊を派遣してただちに暴動を鎮圧し、日本の影響を弱めた。(165) ・1884年には、日本の明治維新にならって近代化を進めようとした金玉均らのクーデターがおこったが、このときも清の軍隊は、これを弾圧した。（甲申事変）朝鮮における清朝との勢力争いに2度敗北した。日本は、清との戦争を予想して急速に軍備を拡張し、やがてほぼ対等な軍勢力をたくわえるにいたった。(165) ・「金玉均（1851-94）」甲申事変のあと日本に逃れたが、のちに中国の上海で暗殺された。(164)

10. 「甲午農民戦争」に関する記述

韓国の国史教科書には、甲午農民戦争（1894年）に関して、全琫準（チョンボンジュン）の活動、公州牛金峙（ウグムチ）で日本軍により多くの死亡者が出たこと等具体的に記述されている。

韓国の国史教科書では、東学農民戦争の失敗を説明するために日本軍の介入、日本との戦いの側面に詳しく触れることが必要となっている。

他方、日本の教科書では、日本の韓国への侵略がロシアとの勢力争いで勝利した後に本格化したことを強調するために、この箇所では詳しくは触れていない。また、日本の歴史教科書においては、「東学」は、その宗教的な運動の側面が強調されている。

<p>・政府は農民軍を鎮圧するために清に援軍を要請し、これに乗じて日本もわが国に軍隊を送った。農民軍は外勢が介入することをくい止めるため、急いで政府と和約を結んだ。そして全州から撤収した後いったん解散した。(211)</p> <p>・全州和約を結んだ後、農民軍が解散すると、政府は日本軍の撤収を要求した。しかし、日本はこれを拒否し、逆に王宮を侵犯し、清日戦争を引き起こした。このように日本軍の侵略行為が露骨になると、農民軍は日本軍打倒を掲げて再び立ち上がった。ソウルに向けて北上した農民軍は公州（コンジュ）牛金峙（ウグムチ）で官軍と日本軍を相手にして激烈な戦闘を繰り広げた。しかし近代式武器で武装した日本軍にたちうちできず、多くの犠牲を払ったまま退いてしまった。(212)</p> <p>・この時集まった東学農民軍の数は10万人あまりに達した。全琫準（チョンボンジュン）が率いた農民軍は、官軍の根拠地である公州に向かって進撃した。官軍は農民軍の攻撃を受け、日本軍が駐屯していた牛金峙に後退した。以後牛金峙をめぐる東学農民軍と官軍・日本軍の間で6、7日間にわたった約500回あまりの激しい攻防戦がくり広げられた。結局、東学農民軍は優秀な近代式武器と装備で武</p>	教出	<p>・1894年、朝鮮の南部で、東学という宗教を信仰する農民らが、政治の改革を求めるとともに、日本人や欧米人を追い出すために立ち上がりました（甲午農民戦争）。(127)</p> <p>・民間の信仰をもとに、儒教や仏教などを取り入れた宗教。西学（キリスト教）に反対しました。(127)</p>
	清水	<p>・朝鮮では、1894年、東学を信じる農民が大反乱をおこした。朝鮮政府は清に援軍を求めたが、日本もこれを知って軍隊をおくった。農民たちは政府と和解したが、日本軍はしりぞかず、朝鮮政府には改革を要求し、清国軍とは戦争をはじめた。(166)</p> <p>・西学（欧米文化）のひろまりに反発して急速にもり上がった朝鮮の民族的宗教を東学といった。(167)</p>
	大書	<p>・1894（明治27）年、東学を信じる人々が農民と結び、外国勢力の追放と政治改革をめざして兵をあげました（甲午農民戦争）。(157)</p> <p>・朝鮮の民間信仰をもとにした宗教団体で、西学（キリスト教）に反対しました。(157)</p> <p>・日清両国は、朝鮮に出兵する場合、事前に通告し合うなどを取り決めた条約（天津条約）を、1885年に結んでいました。(157)</p>
	帝国	<p>・日本も欧米諸国のやり方をまねて、朝鮮半島に勢力をのぼそうと考え、江華島事件以後、朝鮮出兵の機会をねらっていました。そのため、朝鮮を勢力範囲と考えていた清と対立するようになりました。そのころ朝鮮では、重い税金に加え、凶作と朝鮮開港後に進出した日本の承認による米の買い占めで、米の値上がりが続いていた。そうしたなか、1894（明治27）年、西洋文化（西学）に反対する宗教（東学）を進行する農民たちを中心に、日本と欧米諸国を追いはいら、朝鮮の政治改革をめざす反乱がおきました。農民軍は、政府軍を破って朝鮮南部に勢力を広げました（甲午農民戦争）。(170)</p> <p>・朝鮮政府は、農民軍をおさえられなくなり、清に援軍を求めました。日本は清と対抗し、すぐに朝鮮に軍隊を送りました。農民軍と朝鮮政府は休戦しましたが、日本は朝鮮王宮を占拠するなどの内政干渉を行い、清との対立を深めました。そして1894年7月、豊島沖の衝突をきっかけに日清戦争がはじまりました。(171)</p>
	東書	<p>・朝鮮では、日清両国の対立のなかで、政治や経済が混乱したため、1894年、民間信仰をもとにした宗教（東学）を信仰する団体を中心とした農民が、腐敗した役人の追放や外国人の排斥をめざして、朝鮮南部一帯で蜂起しました（甲午農民戦争）。これを機に、清と日本は朝鮮に出兵し、8月に日清戦争が始まりました。(158)</p>
	日文	<p>・1894年、朝鮮では、開国のもたらした生活不安から外国勢力を追放し、政治改革を求める農民が蜂起した。(137)</p>
	日書	<p>・1894年、朝鮮では日本や欧米諸国の進出と朝鮮政府に対する不満が爆発し、東学を信仰する農民が中心となって反乱をおこした（甲午農民戦争）。農民軍は、外国勢力の追い出しと政治の改革を求め、各地で政府軍をやぶった。これをおさえるため、朝鮮政府が清国に助けを求めると、前から清との戦争の準備をしていた日本はただちに朝鮮へ出兵した。</p>

<p>装した日本軍に、多くの死傷者を出したまま惨敗してしまった。生き残った500名あまりは南に後退しながら抗戦したが、後日を期して解散し、逃げる途中、全捧準はしばらくして逮捕された。(212)</p> <p>・東学農民軍は後に抗日義兵戦争に参戦して、抗日闘争の伝統を引き継いでいった。(212)</p>	<p>(158~159)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1860年代に生まれた宗教の一種で、キリスト教(西学)に対抗し、人間の平等をとらえた。朝鮮政府の弾圧にもかかわらず、農民の間に広まった。(159) ・朝鮮政府が清国に助けを求めると、前から清との戦争の準備をしていた日本はただちに朝鮮へ出兵した。(158~159) ・日清両国が出兵したとき、すでに農民軍と朝鮮政府は休戦していた。しかし、日本は軍隊を駐在させつづけるため、改革案を朝鮮政府におしつけ、これに対する回答を不満として、朝鮮の王宮を占領した。そして、清の海軍を攻撃したのち、宣戦を布告して日清戦争をはじめた。(159) <p>扶桑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1894(明治27)年、朝鮮の南部に甲午農民戦争とよばれる暴動がおこった。農民軍は、外国人と腐敗した役人を追放しようとし、一時は朝鮮半島の一部を制圧するほどであった。わずかな兵力しかもたない朝鮮王朝は、清に鎮圧のための出兵を求めたが、日本も清との申し合わせを口実に軍隊を派遣し、日清両軍が衝突して日清戦争が始まった。(164) ・①1885(明治18)年、日清両国が朝鮮に出兵するさいには事前に通知し合うという条約が両国に結ばれていた。(164)
---	---

11. 甲午(カボ)改革, 日清日露戦争に関する記述

甲午改革は、日本の検定教科書には記載されていない。下記は韓国の国史教科書に記載されている部分の抜粋・引用である。

<ul style="list-style-type: none"> ・日本軍は景福宮を包囲し、閔氏勢力を追い出した後、興宣大院君を押し立てて改革の先頭に立たせた。金弘集(キムホンジブ)を総理とする新内閣がつくられ、改革の推進のため軍国機務処(クングンキムチョ)が新設された。軍国機務処は臨時機関として政治、経済、社会など国家の主要政策に対する改革案を審議した。このとき実施された改革を甲午改革と呼ぶ。(213) ・日清戦争が日本の勝利に終わり、それまで改革に消極的だった興宣大院君が退き、日本とアメリカに亡命中だった朴泳孝(パクヨンヒョ)、徐光範(ソグァンボム)などが帰国して改革をおし進めた。(213) ・甲午改革はきちんと行われなかった。これは政治的、社会的不安と日本の侵略的干渉に対する国民の反発が大きかったためである。(214) ・そしてわが国の現実を十分考慮しないまま、西洋や日本に合わせて制度を近代的にしようとした改革は限界をもっていた。何より国防の強化のための軍事制度の改革をおろそかにし、日本の朝鮮侵略に有利な内容が含まれていたことも問題であった。(214)
--

日清日露戦争前後の両国関係について、韓国の国史教科書には、日本の支配力が及ぶ過程として説明されている。

<ul style="list-style-type: none"> ・日清戦争で日本が勝利した後、朝鮮は日本からさらにひどい内政干渉を受けるようになった。このとき以来日本は朝鮮を支配しようとする野心を露骨に表した。これに高宗(コジョン)と明成(ミョンソン)皇后は日本の干渉から逃れる方法を探そうとした。日本は、日清戦争で勝利して中国から遼東半島を奪った、これは日本がロシアの南下をくい止め、中国大陸で勢力を広げるためのものだった。(223) ・ロシアの勢力が大きくなり、日本との対立が激化すると、世界の各地でロシアと対立していたイギリスは、英・日同盟を結んで日本を助けた。このような両国の対立はついに露日戦争となって現れた(1904年)。(235) ・「露日戦争の結果締結されたポーツマス条約の主要内容」1. 日本は韓国に対して、自治的、軍事的、経済的に特別の権利を持つ。2. 遼東半島の租借権と南満州鉄道を日本に譲る。3. サハリン南部を日本に譲る。(235)

日本の検定教科書では、日清・日露戦争の経緯と、下関条約、三国干渉、ポーツマス条約について、韓国への支配権を強めていく経緯を、主にロシアとの関係で説明している。以下は、各戦争の事実経緯、条約内容等を除く、両国関係の説明部分である。

教出	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮は1897年に、国号を大韓民国（韓国）とあらためました。(129) ・1904（明治34）年2月、日本軍は旅順を攻撃し、中立を宣言していた韓国の仁川に上陸して、日露戦争がはじまりました。(130) ・戦争は韓国と満州がおもな戦場となりました。(131) ・韓国や中国では、日本の東アジアでの勢力拡大に反対する民族運動が活発になりました。(131) ・日清戦争後には、綿糸が清や韓国などにさかんに輸出されました。(135)
清水	<ul style="list-style-type: none"> ・「日清戦争要図」漢城（いまのソウル）南西の豊島沖で戦争がはじまった。(166) ・日清戦争後の朝鮮では、三国干渉の結果、改革を指導していた日本の権威は弱くなり、ロシアの勢力が強まった。(160) ・1900年には中国民衆が西洋勢力を排斥しようと義和団運動をおこして、失敗したが、そののちロシアは満州に大軍をおくるようになった。日本は朝鮮（韓国）もロシアにうばわれるのではないかと心配しはじめた。(167) ・朝鮮は、1897年に大韓民国と名称をあらため、国王を大韓皇帝とした。(167) ・日露戦争は、日本の韓国支配を確保させ、中国・ロシアからも領土をうばった。(167)
大書	<ul style="list-style-type: none"> ・日本は、満州はロシアの、朝鮮は日本の支配下におくという交渉をロシアと行いましたが、両者の対立は大きく、1904年、日露戦争がはじまりました。(158)
日文	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアは、大軍で満州の占領をつづけ、朝鮮半島にも進出しようとした。(138) ・満州と韓国をめぐる日本とロシアとの交渉が行きづまると、戦争の危機が高まった (139)
日書	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアは義和団事件のあとも、満州から軍隊を引きあげず、朝鮮にも支配力を強めようとした。日本は朝鮮の支配をめざしていたので、ロシアとの対立がはげしくなった。日本とロシアの間では、ロシアが満州を、日本が朝鮮を支配下におくという交渉もおこなわれたが、まとまらなかった。そのころイギリスは、ロシアの東アジア進出に対抗する同盟国を求めていた。そこで1902年、中国でのイギリスの利益と、中国の朝鮮での日本の利益を守ることを認めあつて、日英同盟が結ばれた。これによって日本とロシアの対立はさらに深まった。(161) ・日清戦争後には、中国・朝鮮に対する綿糸の輸出がさらにふえ、紡績業は発達した。(164)
扶桑	<ul style="list-style-type: none"> ・②この構想は満韓交換論といわれ、伊藤博文らが唱えた。(166) ・「日英同盟の利点 小林意見書」韓国の問題を解決するためには他の強国と結んで、ロシアがやむをえず日本のいうことを聞くようにするほかはない。(167) ・日露戦争は火ぶたを切った。戦場になったのは朝鮮と満州だった。(167)

12. 乙未（ウルミ）事変（1895年）に関する記述

下記は韓国の国史教科書に記載されている乙未事変（明成皇后暗殺）に関する記述部分である。

下記のように、乙未改革、義兵運動とも関連させて記述している。

<ul style="list-style-type: none"> ・三国干渉によりロシア勢力の優位が現れると、日本に対して不満を抱いていた高宗と明成皇后は、ロシア勢力を利用する政策をおし進めた。(223) ・朝鮮に対する侵略政策をおし進めていた日本は朝鮮のこのような動きにひどく当惑し、明成皇后は日本の朝鮮侵略に妨げとなる人物とみられた。そうして日本公使は日本軍と日本人のごろつきを動員して、王宮に侵入し、明成皇后を殺害するという蛮行を犯した。これを乙未事変という（1895）。(224) ・日本の野蛮な行為は朝鮮の主権をふみにじるもので、国際社会でも日本に対する非難が高まった。それにもかかわらず、日本政府はこの事実を知らないとして言い逃れた。日本の圧力でつくられた親日内閣はそれまで遅々として進まなかった改革を積極的に押し進めようとする態勢を整えた。陰曆廃止と陽曆使用、銃刀法施行、郵便制度実施、建陽年号制定、断髪令などの改革が行われた。これを乙未改革という（1895年）。(224) ・日本の明成皇后殺害と内政干渉によって、わが民族の反日感情はさらに高まった。特に断髪令は国民の怒りを爆発させるきっかけとなった。(225) ・開港以後続いてきた日本の経済的、政治的侵略と明成皇后殺害に怒った国民の反日感情が、断髪令をきっかけに爆発し、抗日義兵が起るようになった。義兵運動は、その前から西洋との交渉、特に日本との条約締結に反対し、彼らの侵略を警戒することを主張していた儒学者が中心となって起きた。(225) ・義兵運動は日本の侵略をくい止め、国と民族を守る民族運動の流れの一つに続くこととなった。(225) ・高宗がここにどまった約1年間、ロシアは財政と軍事顧問を送ってわが国の内政に干渉した。これは独立国家である朝鮮の対外的威信を落とすものだった。そしてこの時期にロシアをはじめアメリカ、日本などいろいろな国は鉱山採掘権、鉄道敷設権、山林伐採権など多くの経済的利権を奪っていった。(226)

乙未事変（明成皇后暗殺）について触れた日本の検定教科書における教科書記述としては、次のものがある。

日書	<ul style="list-style-type: none"> ・「閔妃1851－1895」朝鮮国王のきさき。しばしば政治の実権をにぎった。(159) ・日清戦争後、日本の領土とされた台湾では、独立運動がおこったが、日本は軍隊を派遣してこれを弾圧し、台湾を植民地として支配した。朝鮮では、日本公使らが朝鮮の王妃を暗殺したが、日本よりの政権をつくることには失敗した。(159)
----	--

日本の検定教科書の中には、下記のように、日本人の朝鮮人に対する優越感や差別意識が顕在化した点に触れているものがある。

教出	・日清戦争に勝利した結果、東アジアで日本の勢いは大きくなり、日本のなかには、中国や朝鮮に対して優越感や差別意識をもつ人もいました。(127)
帝国	・日本人の間には、日清・日露戦争などに勝利するなかで、日本人はアジアの中ですぐれていると考える人も増えてきました。(174)
日文	・戦争の勝利でアジアの大国となった日本には、中国や朝鮮などから学生がきたが、国民の間には、中国人や朝鮮人を見下す考えも広まっていった。(137)

13. 韓国併合（合邦条約）に関する記述

韓国の国史教科書では、日本による外交権の剥奪、乙巳（ウルサ）条約の強要、統監府の設置、高宗による拒否・無効、ハーグ特使、安重根、高宗の強制的退位、丁未条約を経て、行政各次官に日本人が就いたこと、軍の強制解散について説明されている。また、日本軍に虐殺された義兵の数等が記されている。

下記表に見るように、韓国の国史教科書には、乙巳条約について、高宗が最後まで拒否したことをあげて、不法性を強調する。韓国の学界は、乙巳条約が平和的な方法で締結されなかった点、条約締結の代表者が韓国皇帝に委任された代表者ではない点、大韓帝国の条約批准権者である光武皇帝（高宗）が承認、批准しなかった点等から、乙巳条約を根本的に無効であるとみなしていることを反映したものである。このため、高宗が乙巳条約に最後まで反対したことを明示し、ハーグ特使事件が記載され、韓国併合（合邦条約）の不法性を強調している。

日本の検定歴史教科書では、韓国統監府、朝鮮総督府について触れ、加えて、外交権の剥奪、軍隊の解散、安重根による伊藤博文の暗殺、武力を背景とした併合であること、日本軍が警戒する中に併合がなされた点、天皇直属の総督である点、生活に困り日本へ移り住んだ人の多くみられたこと、国名を韓国から朝鮮に、漢城を京城に変えたこと、学校での日本語強制、選挙権のなかったこと等々について記した教科書もみえる。

<ul style="list-style-type: none"> ・露日戦争で勝利した日本はわが国に対する侵略を本格的におし進めた。わが国の外交権を奪ったばかりか、ソウルに統監府を設置することを主な内容とする乙巳（ウルサ）条約を強要した（1905年）。 	教出	<ul style="list-style-type: none"> ・日露戦争に勝利した日本は、武力を背景に韓国を保護国とし、韓国の外交権をうばって統監府をおきました。そのため韓国では、武器をとって日本と戦う抵抗運動がおこりました。(132) ・そのため韓国では、武器をとって日本と戦う抵抗運動が
---	----	---

<p>この条約で日本はわが国の外交権を奪ったばかりか、統監府を設置してわが国の内政全般にわたって干渉しはじめた。(235)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高宗(コジョン)皇帝の拒否にもかかわらず、日本が乙巳条約を一方的に発表すると、これに反対する民族の怒りがさまざまな形で爆発した。(235) ・いわゆる乙巳条約文書 高宗肯定が最後に書名を拒否したので非合法的な条約である。(235) ・乙巳条約に反対する民族の動きが展開される中、高宗皇帝は条約締結が無効であることを宣言し、国際社会に独立国家としての正当性を訴えた。 ・第2回万国平和会議が開かれていたオランダのハーグに李相尙(イサンソル)、李儁(イジュン)、李瑋鐘(イウイジュン)を特使として派遣して乙巳条約が無効であることを国際社会に知らせようとした(1907年)。しかしこのような高宗皇帝の外交努力は列強の韓国支配を認めていた世界情勢のもとでは、成功を収められなかった。一方、乙巳条約以後は大規模の義兵部隊があちこちで日本軍と戦闘を行った。(237) ・(ハーグ特使)第2回万国平和会議が開かれると、高宗皇帝はこの機会を利用して乙巳条約が無効であることと日本の侵略の事実を世界に広く知らせるために李相尙、李儁、李瑋鐘の三人を特使として派遣した。 ・彼らは各国の代表に乙巳条約が強圧によって行われたことを主張し、アメリカ記者協会に列席して日本の侵略を糾弾する演説を行うなど、わが国の事情を知らせるのに力を傾けた。しかし、わが国の外交権を日本が掌握していたばかりか、日本の激しい妨害工作によって三特使は会議に列席できなかった。(237) ・義兵将として国内外で抗日戦を展開していた安重根(アンジュングン)は、初代統監としてわが国侵略の最前線にたっていた伊藤博文がロシアの代表と会談するためにハルビンに到着したとき、彼を射殺して民族独立の意思を明らかに示した(1909年)。(238) ・ハーグ特使派遣を口実に、日本は彼らの侵略に妨害となる高宗皇帝を軍隊で脅して強制的に退位させた(1907年)。このことが伝わり、国民の抵抗は激しく広まったが、日本は武力でこれを押さえつけ、韓日新協約(丁未〔チョンミ〕条約)を強制的に締結した。この条約で日本人が行政各部の次官に任命され、日本人統監がわが国の内政を完全に掌握するにいたった。(239) 	<p>おこりました。日本は、やがて韓国内政の実権をにぎり、軍隊を解散させました。解散させられた兵士は、義兵に加わり戦いました。韓国の安重根が統監府の初代統監だった伊藤博文を殺するという事件もおこりました。(132)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は韓国の抵抗をおさえて、1910(明治43)年、韓国を植民地とし(韓国併合)、韓国を朝鮮とあらため、朝鮮総督府をおいて支配しました。(132) ・「韓国の皇太子と伊藤博文」伊藤が韓国の皇太子を日本に留学させたときの写真です。皇太子が日本の着物を着ています。(132) ・朝鮮で使用された歴史の教科書と日本語の授業をうける朝鮮の子どもの様子。(133) ・朝鮮人の権利や自由はきびしく制限されました。朝鮮人の学校では、日本語や日本の歴史、修身が教えられるようになりました。(133) ・このようななかで、朝鮮では鉄道や農業用水などの施設は整備されていきました。(133) ・「立ち上がる義兵たち」武装して日本軍に抵抗しました。(133)
<p>清水</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国に関しては、欧米の列国の支持をえたうえで1905年に保護国とした。外交権をうばい、統監をおいて内政の監督もはかった。(168) ・韓国に関しては、欧米の列国の支持をえたうえで1905年に保護国とした。外交権をうばい、統監をおいて内政の監督もはかった。これに対し、韓国民ははげしく抵抗し、独立運動家安重根が初代統監の伊藤博文を暗殺した。その翌1910年、日本は韓国併合を強行した。(168) ・「韓国の義兵」民族の自発的な武装組織を義兵とよんだ。義兵には約15万人が参加したといわれ、日本にねばり強く抵抗した。(168) ・韓国民ははげしく抵抗し、独立運動家安重根が初代統監の伊藤博文を暗殺した。その翌1910年、日本は韓国併合を強行した。(168) ・日本は朝鮮総督府をおき、台湾と似た統治をおこなったが、古い歴史を誇る朝鮮の人びとは抵抗をつづけた。(169)
<p>大書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日露戦争後、日本は朝鮮(韓国)の外交権をうばい、韓国統監府をおいて、さらに内政権もにぎって、軍隊を解散させました。(160) ・解散させられた兵士は、農民とともに日本に抵抗(義兵運動)し、初代韓国統監であった伊藤博文が、民族運動家の安重根に射殺される事件も起こりました。(160) ・1987年、朝鮮は諸外国と対等であることを示すため、国名を大韓民国と改めました。(160) ・日本は、1910年、軍隊の力を背景にして朝鮮を植民地にしました。これを韓国併合といいます。併合により朝鮮統監府がおかれて軍人が総督となり、日本の軍隊や警察を全土に配置して抵抗運動をおさえました。(160) ・「朝鮮総督府」(左の白い建物、1935年撮影)この建物は、1995年に解体がはじまり、現在はありません。(160) ・あらゆる政治活動を禁止し、新聞の発行も制限し、学校では、日本語や日本の歴史を強制的に教えました。このように、朝鮮民族の歴史や文化を否定し、日本に同化させる政策を進めましたが、台湾と同様、朝鮮の人々には選挙権は認めませんでした。いっぽう、日本の支配に対する朝鮮の人々の抵抗は続けられました。(160) ・1910年、日本は漢城を京城と改称しました。(179)
<p>帝国</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大韓民国の略称で、朝鮮は1897年からこの名称を用いて

<ul style="list-style-type: none"> ・高宗を強制的に退位させたあと、日本は大韓帝国の財政が困難であることを口実にして、軍隊を強制解散させた。軍隊が解散させられると、軍人たちはこれに抵抗して抗日闘争を展開した。(239) ・1907年8月から1909年末までに日本軍によって虐殺された義兵の数は16000あまり、負傷者は36000人あまりに達した。(240) ・各地で抗日戦が続けられたが、武器や戦闘経験の面で日本軍に比べて劣勢であり、日本軍が大規模作戦をくり広げたため義兵活動はだんだん弱まっていった。一部の義兵部隊は国権を奪われた後に満州に移動して、独立軍として活動した。(240) ・ハーグ特使事件を口実に高宗(コジョン)皇帝を強制的に退位させた日帝は、軍隊を解散させた。その後、司法権と警察権まで掌握して軍事、行政、司法、治安などあらゆる分野の支配権を掌握していった。日帝は激しい抗日戦争をくり広げていった義兵活動のある程度抑えると、韓国を植民地化する具体的な作業に入っていった。そして一進会の李容九(イヨング)、宋秉峻(ソンビョンジュン)などが親日派の先頭に立ち、国を日本に併合させる各種の請願や声明書を発表した。これは国権侵害が韓国人の要請によって行われるように偽装しようとするはかのごとだった。ついに日帝は軍隊と警察を全国各地に配置しわが民族の抵抗をあらかじめ遮断し、李完用(イウォン)を中心とした売国内閣といわゆる合邦条約を締結した(1910年)。こうして長い間独自の文化を創造しながら発展してきたわが民族は国を奪われ、日帝の奴隷状態に陥るようになった。(257) ・「統監官舎」伊藤博文をはじめ歴代統監がここで暮らし、1910年8月22日のいわゆる合邦条約も李完用と寺内正毅がここで調印した。(257) ・国権を剥奪した日帝は朝鮮総督府を設置してわが民族を強圧的に統治した。日本の陸海軍大將の中から任命された朝鮮統督は、行政権はもちろん、司法権や軍事権などあらゆる権限をもつ絶対的な地位にあった。(257) ・韓国に対する日帝の植民地支配のやり方は憲兵警察を先頭にした強圧的で非人道的な武断政治で、憲兵が全国的に配置されて警察の任務を担った。(258) ・「憲兵補助員」日帝は韓国人を憲兵補助員とし、韓国人弾圧の先頭に立たせる狡猾な方法をとった。(258) ・韓国人のあらゆる政治活動は禁止され、集会や結社の自由を剥奪され、愛国運動 	<p>いました。(174)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「日本の韓国併合に対する朝鮮民衆の抵抗運動(1906-1911)」(175) ・1905年、日本は韓国を保護国としたうえで、伊藤博文を韓国統督として派遣し、内政・外交とも日本の支配下におきました。そのため韓国では激しい抵抗が全土に広がり、伊藤博文が暗殺される事件もおこりました。(174) ・安重根は、伊藤博文を射殺したため、日本では暗殺者とされていますが、朝鮮国では民族的英雄であり、朝鮮民族のための独立運動を行った人物として尊敬されています。そのため、韓国の教科書では次のようにとりあげられています。「安重根は、韓国侵略の元凶である伊藤博文が、大陸侵略についてロシア代表と交渉するために、満州のハルビンに来たところを射殺した。安重根のこの行動は、日本の侵略に対するわが民族の強い独立精神をよく表したものである。」(175) ・1910年、日本は韓国を併合して、植民地としました(韓国併合)。朝鮮総督府において支配を開始し、韓国を朝鮮と改め、首都漢城(現在のソウル)も京城と名をかえさせました。日本の支配に対する朝鮮、朝鮮民衆の抵抗は、その後も続けられました。(174) ・植民地となった朝鮮では、学校で日本語や日本の歴史・地理が教えられ、朝鮮固有の文化や歴史を教えることは禁じられました。(175) ・1892年になると、国産綿糸が国内市場の80%をこえる状態にかかりました。さらに、日清戦争後には、清や朝鮮にも輸出されるようになりました。(176)
<p>東書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日露戦争のさなかから、韓国は、日本による植民地化の動きにさらされていきました。1905(明治38)年には外交権がうばわれ、1907年には皇帝が退位させられて、韓国内政は韓国統督府ににぎられました。このため国内では民族的抵抗運動が広がり、日本によって解散させられた兵士たちは、農民とともに立ち上がりました。これは日本軍によって鎮圧されましたが、日本の支配に対する抵抗は、その後も続けられました。(160) ・1910年、韓国は日本に併合されました。日本は、朝鮮総督府を設置して、武力を背景した植民地支配をおし進めました。(160) ・学校では朝鮮史を教えることを禁じ、日本史や日本語を教えて、日本人に同化させる教育を行いました。(160) ・朝鮮総督府(左の白い建物)と朝鮮王朝時代の王宮、朝鮮総督府は1910年に設けられ、日本の朝鮮支配の中心となりました。この写真は1935年に撮影されたもの。(160) ・「日本語で授業を受ける朝鮮の子どもたち」明治の終わりの教室のようす。(160)
<p>日文</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日露戦争後、日本は韓国を保護国とし、統監府において内政の実権をにぎり、韓国の軍隊を解散させた。(140) ・韓国の人々は、日本の支配に抵抗して、各地に義兵闘争をくり返した。そうした中、安重根が、初代統監の伊藤博文を、満州のハルビンで暗殺した。(140) ・日本は、半日抗争を軍隊と警察の力でおさえ、1910(明治43)年、韓国を日本の領土に併合し(韓国併合)、朝鮮とよんで、植民地として支配した。(140)
<p>日書</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日露戦争後、日本は韓国に圧力を加えて外交権をうばい、韓国統督府という役所において韓国の国内の政治も支配した。さらに、軍隊も解散させた。このような日本の侵略に対して、朝鮮の民衆は武器をもって各地で立ち上がり、義

<p>団体も解散させられた。また、『皇城新聞』や『大韓毎日申報』など民族の新聞の発行が禁止され、多くの愛国志士たちが逮捕されたり、投獄されて生命を失った。(258)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統監府は韓民族を脅かして屈服させるため教員にも制服を着用させ、剣を下げさせた。それでも不安で韓半島の各要所に日本軍を駐屯させた。日帝は彼らの植民地支配におとなしく従う韓国人をつくる教育政策をおし進めた。日本語を中心に教科を編成し、韓国人に高等教育を受ける機会を与えなかった。韓国人には、こき使うのにふさわしい初歩的な技術と実務的な内容しか教えなかった。(258) ・このような日帝の強圧的な植民統治下で民族の指導者たちは海外に亡命し、義兵も次第にその舞台を中国の東北地方や沿海州などの地に移していった。(258) 	<p>兵運動などをおこして、はげしく抵抗した。(163)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1909年には、朝鮮の独立運動家安重根が、初代韓国統督であった伊藤博文を、満州のハルビンで射殺した。日本は、日本に対する抵抗運動を軍隊の力でおさえた。(163) ・1910年、日本の軍隊が警戒するなか、韓国皇帝に国をおさめる権限を日本にゆずる条約に調印させ、韓国を日本の領土に併合した。(163) ・日本は韓国を併合したのち、朝鮮統督府をおいた。天皇の直属する統督には日本の軍人が任命され、朝鮮の各地に軍隊をおいて支配した。(163) <p>扶桑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「韓国服の伊藤博文」伊藤博文は、1906年に初代韓国統監として赴任したが、1909年ハルビンで暗殺された。(170) ・日露戦争後、日本は韓国に韓国統監府を置いて支配を強めていった。欧米列強は、イギリスのインド、アメリカのフィリピン、ロシアの外モンゴルなど、自国の勢力圏の支配を日本が認めることなどと引きかえに、日本が韓国と影響下におさめることに異議をとえなかった。日本政府は、日本の安全と満州の権益を防御するために、韓国の併合が必要であると考えた。1910(明治43)年、日本は、武力を背景に韓国内の反対をおさえて、併合を断行した。(170~171)
---	--

14.3・1独立運動に関する記述

韓国の教科書では、3・1独立運動について、2月8日の日本での宣言(東京留学生宣言)が取りあげられている。2・8独立宣言は、韓国では3・1独立運動の導火線として位置付けられ、3・1運動が全国的に多数の人々が参加するようになった背景として説明されている。

・日本に留学していた韓国人留学生たちは、このように変化する国際情勢を独立運動の機会と考え、日本の東京で朝鮮青年独立団を組織し、韓国の独立を要求する独立宣言と決議を発表した。これが2・8独立宣言だった(1919年2月8日)。(268)

・「2・8独立宣言決議文」1.本団は韓日合併がわが民族の自由意思から出ず、わが民族の生存・発展を脅かし、登用の平和を蹂躪する原因になるという理由から独立を主張する。2.本団は日本の議会及び政府に、朝鮮民族大会を招集して大会の決議によってわが民族の運命を決定する機会を与えることを要求する。3.本団は万国平和会議に民族自決主義をわが民族に適用することを要求する。4.前に要求した内容が失敗したときには、日本に対して永遠に血戦を宣言する。これから発生する惨禍にわが民族はその責任を負わない。—朝鮮青年独立団代表—。(268)

韓国の国史教科書では、3・1独立運動(1919年)に関し、高宗の死から、孫秉熙など民族代表の活動、柳寛順(ユガンスン)の殉死、提岩里での事件などに触れている。

・国内では第1次世界大戦が終わる頃の1918年末から、孫秉熙(ソンビョンヒ)、李昇薫(イスンフン)、韓龍雲(ハンヨンウン)など宗教界、国内の民族指導者たちが世界情勢の変化に関心を持ち、学生団体と結びついて民族をあげた独立運動を準備していた。そのような中、1919年のはじめ乙巳条約に最後まで反対していた高宗皇帝が逝去したが、これは日帝による毒殺であるという噂が広がり、民心を大いに刺激した。さらに、東京の留学生たちの2・8独立宣言が伝えられ、独立運動に対する民族の熱望はさらに高まっていった。(268)

・ソウルでは孫秉熙をはじめ民族代表33人が3月1日正午に泰華館(テファグアン)で独立宣言式を行い、同じ時刻に学生と市民はタブコル公園に集まって独立宣言書を朗読し、大極旗(テグッキ)を振って独立万歳デモを繰り広げた。地方あちこちでも独立宣言書を朗読し、大極旗を振って万歳デモを展開した。(268)

・日本の警察と軍隊は、平和的な方法で「独立万歳」を叫ぶデモ隊を、銃剣で無慈悲に鎮圧した。このとき、若くして忠清南道(チュンチョンナムド)天安(チョナン)で独立万歳デモを主導した柳寛順は拘束されて獄中

で殉国し、日本軍は華城(ファソン)提岩里(チェアムリ)の住民たちを教会に押し込んだまま火をつけ、銃撃を加える蛮行を行った。数多くの民家や学校なども日帝の蛮行により破壊されたり、焼かれてしまった。(269)

日本の検定歴史教科書は、3・1独立運動に関し、参加者、死者、負傷者など、具体的な数字を明記するものがみえる(下線)。柳寛順については数社が解説を加えている。

教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・「独立運動のレリーフ(ソウル・タブコル公園)」1919年3月1日、ここで日本からの独立を宣言する書が読まれました。(152) ・日本の植民地とされていた朝鮮では、1919(大正8)年3月1日、京城(今のソウル)などで、朝鮮独立が宣言され、街頭で「独立万歳」をさげぶ行動がおり、朝鮮全土に広がりました。(三・一独立運動)。この運動は、平和的に非暴力ですすめられましたが、日本は軍隊や警察の力で、これを弾圧しました。これに対し、朝鮮の人々は各地で立ち上がり、独立運動は朝鮮全土、さらには満州などにも広がりました。運動は5月までさかんにおこなわれました。(152) ・「朝鮮での独立運動」約200万人が参加し、自由と独立を求める朝鮮民族の意思を国内外に示しました。(152)
清 水	<ul style="list-style-type: none"> ・日本は朝鮮統督府をおき、台湾と似た統治をおこなったが、古い歴史を誇る朝鮮の人びとは抵抗をつづけ、1919年にはもとの皇帝の死去を機に独立運動を展開して、日本のきびしい弾圧をうけた(三・一独立運動)。(168) ・「三・一独立運動 朝鮮の218の郡のうち、211の郡に運動がひろまった。(168) ・「三・一独立運動レリーフ」1919年3月1日にはじまった独立運動に、この少女(柳寛順)は15歳で参加し、のちにデモを組織するなどの活動をおこなったが、とらえられ、1920年、16歳で獄死した。(ソウル市パゴダ(いまはタブコル)公園内)(169) ・「中国と日本(1920年ころ)」日本は日清戦争によって台湾を、日露戦争で樺太(サハリン)の北緯50度以南を領土とし、韓国併合によって朝鮮を植民地とした。こののちも、日本は中国に勢力を拡大しようとし、国際的にも日本に対する不信がひろがっていった。(183)
大 書	<ul style="list-style-type: none"> ・1919年3月1日、朝鮮の独立をめざす人々が、ソウル(京城)で独立宣言文を発表し、「大韓独立万歳」をさげんでデモ行進を行いました。この動きは朝鮮全土に拡大し、200万ともいわれる人々が参加する運動となり、日本政府は、憲兵警察制度の廃止や、朝鮮語の新聞の発行も許可することになりました。(179)
帝 国	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の植民地となった朝鮮でも、1919年3月1日、京城(現在のソウル)のパゴダ公園で独立宣言が行われ、独立万歳をさげぶ民衆運動が朝鮮各地に広がりました(三・一独立運動)(191) ・「柳寛順 1904-1920」ソウルの梨花学堂(女子校)に在学中に、柳寛順は三・一独立運動に出会いました。寛順は運動に加わり「朝鮮独立万歳」をさげんだため逮捕されてしまいました。しかし獄中でもその志を曲げずにいたため、拷問を受けて獄死してしまいました。16歳でした。(191)
東 書	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の植民地支配のもとに置かれていた朝鮮では、1919年3月1日、ソウルで独立をめざす知識人や学生らが、日本から独立を宣言する文章を発表し、人々は「独立万歳」をさげんでデモ行進を行いました。これに刺激されて、独立運動は短期間に朝鮮全土に広がりました(三・一独立運動)。朝鮮総督府は、武力でこれを鎮圧するいっぽう、これまでの武断的な支配をゆるめる姿勢を示したため、朝鮮の近代化を求める動きが活発になりました。また、独立運動は、その後も続けられました。(175)
日 文	<ul style="list-style-type: none"> ・「柳寛順」日本の植民地支配に反対する朝鮮の独立運動は、人々の万歳のさげびとともに広がった。柳寛順は、当時16歳の女学生だったが、1919年4月1日、彼女は抗議の行進の先頭に立った。しかし日本軍にとらわれの身になり、翌年10月12日牢獄の中でなくなった。(159) ・朝鮮でも、独立と民族の自由を求める動きがおり、1919年3月1日、ソウルで独立運動が発表された。これをきっかけに、独立を求める運動が全土に広まった(三・一独立運動)。日本は、軍隊や警察の力で運動を弾圧し、約8000人の死者と1万6000人の負傷者を出した。独立運動はその後もつづき、日本の支配をゆさぶった。(159)
日 書	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国併合ののち、日本の植民地支配に苦しんでいた朝鮮の人々も独立を求めて立ち上がった。パリで講和会議を開催中の1919年3月1日、ソウルの公園に集まった人々は、朝鮮の独立は民族の当然の権利であり、東洋の平和のためにも独立が必要であると、独立を宣言した。つづいて「独立万歳」をさげんで示威運動をおこした。これをきっかけに独立運動は朝鮮全体に広がり、以後3カ月にわたってつづけられた(三・一独立運動)。運動には、のべ200万人が参加し、自由と独立を求める朝鮮民族の力を内外に示した。これに対して、日本は軍隊を派遣し、きびしい弾圧を加えた。(184)

	<ul style="list-style-type: none"> ・「三・一独立運動」植民地支配からの独立を求め、ソウルの中心街を行進する女子学生たち。(184) ・「柳寛順(1904-1920)」ソウルの梨花女子学堂に学ぶ15歳の時、独立運動に参加し、投獄されて拷問をうけ、死亡した。(184) ・日本の弾圧による死者は、約8000人にのぼるといわれている。(184)
扶桑	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の支配下の朝鮮では、1919年3月1日、旧国王の葬儀に集まった人々がソウルで独立を宣言し、「独立万歳」を叫んでデモ行進を行った。この動きはたちまち朝鮮全土に広まった(三・一独立運動)。(185)

15. 日本人の言説に関する記述

日本の教科書には、併合や3・1独立運動等に対する批判的な日本人側の言説が紹介されている。

3・1独立運動についての日本人の反応は、「暴動」とみなした見解も紹介されている。

教出	<ul style="list-style-type: none"> ・「浅川巧(1891-1931)」韓国のソウル郊外の共同墓地に、一人の日本人の墓があります。その墓石には「韓国の山と民芸を愛し韓国人の心のなかに生きた日本人、ここで韓国の土となる。」とハングルで刻まれています(「浅川巧写真・墓地」)。日本は1910年、韓国を併合し、独立運動をおさえつけていました。朝鮮には学ぶものなどないと思っていた多くの日本人とはちがって、浅川は朝鮮の白磁(陶磁器の種類)に魅せられたのでした。浅川は1891年、山梨県北巨摩郡甲村(今の北杜市)に生まれ、県立農林学校を卒業後、秋田県で林業技術者としてはたらいたのち、日本の植民地下にあった朝鮮にわたり、林業試験物の技術者となりました。当時、木のない山が多かった朝鮮の山々に緑を取りもどすために努力し、めざましい研究成果を発表するなどして活躍しました。仕事で朝鮮全土を歩くかわら、朝鮮の民芸や高麗・朝鮮の陶磁器に関心をもって熱心に研究し、兄とともに白磁をほめたたえました。そして、浅川がバジにげたをはいて、街を歩く姿はしばしば朝鮮人とまちがえられたほどでした。浅川は決して裕福ではない収入のなかから、朝鮮の貧しい子どもたちに学生のための費用を援助したりして、多くの朝鮮人から慕われました。1920年には千葉県に住んでいた著名な民芸評論家の柳宗悦を訪ねて、朝鮮民族美術館の設立を熱心に説きました。1924年に今のソウルに完成したこの美術館には、壺やたんす、屏風など300点をこえる朝鮮の工芸品が展示されました。(177)
大書	<ul style="list-style-type: none"> ・「石川啄木の短歌」地図の上朝鮮国にくるぐると墨をぬりつつ秋風を聴く(『創作』1910年) 日本国内が韓国併合のニュースにわかえるなか、詩人の石川啄木は上のようによみました。(160) ・朝鮮の美術を高く評価していた柳宗悦は、日本の朝鮮政策を批判しました。柳は、『朝鮮の友に贈る書』などのなかで、「日本にとっての兄弟である朝鮮は、日本の奴隷であってはならぬ。それは、朝鮮の不名誉であるよりも、日本にとってはずかしいことである。」「自由と独立をうばい、日本の思想をおしつけようとするが、心までうばいとすることはできない。」「独立が朝鮮の人々の理想になるのは、必然的な結果であろう。」と述べています。また、日本国内の民主化を主張した吉野作造は、三・一独立運動に理解を示し、「どの民族にあっても、祖国の回復をはかることは、最高の道徳である。」と述べました。(179)
帝国	<ul style="list-style-type: none"> ・吉野は、民族自決をととぶ主張をし、三・一独立運動や五・四運動を評価しました。(191) ・「柳宗悦 1889-1961」雑誌『白樺』で執筆した人物です。朝鮮の工芸品の美しさに感動し、日本が朝鮮を植民地にすることを批判しました。ソウルに朝鮮民族美術館をつくりました。また、職人たちの生み出す美にも関心を寄せて、「民芸」ということばをつくり出しました。(197)
東書	<ul style="list-style-type: none"> ・「インターナショナリスト 柳宗悦」朝鮮で三・一独立運動が起こったとき、ほとんどの日本人は「暴動」と見ていました。しかし、独立運動に共感をもっていた日本人もいました。その一人であった柳宗悦はこう言っています。「われわれ日本人が、今朝鮮人の立場にいと仮定してみたい。おそらく義憤好きなわれわれ日本人こそ、最も多く暴動をくだてる仲間であろう。・・・わがことならぬゆえに、ただそれを暴動だといってあなどるのである。・・・反抗するかれらよりもいっそうおろかなのは、圧迫するわれわれである。」 柳は、当時だれもかえりみることのなかった朝鮮の白磁の美を、偏見のない目で見いだし、そうしたものを生み出す人々を敬愛しました。そのことを通じて、朝鮮をおくれた国、貧しい国としか見ない日本人に、もう一つの朝鮮像をえがいてみせたのでした。朝鮮の美術工芸との出会いは、さらに柳の日本の民芸への関心につながりました。・・・(175)
日文	<ul style="list-style-type: none"> ・「柳宗悦」朝鮮をたびたび訪れ、仏像や陶磁器などの造形美術の価値をいち早く見いだし、そし

	て、それを生み出した朝鮮の人々を敬愛した。(169)
日書	<ul style="list-style-type: none"> ・「地図の上 朝鮮国にくるぐると、墨をぬりつつ秋風を聴く 石川啄木のうた」歌人啄木は併合後、朝鮮の民衆への共感をうたった(1910年9月9日作)。(163) ・「内村鑑三 戦争に反対する意見」日清戦争によって、朝鮮の独立はかえってあやうくなり、戦勝国日本の道徳はたいそう腐敗しました。(171)

16. 「文化統治」に関する記述

韓国の国史教科書は、3・1独立運動後の懐柔的民族分裂統治として、ハングル新聞の許可、総督府官吏への韓国人の任命、親日派の育成等について記述している。

	<ul style="list-style-type: none"> ・民族をあげた3・1運動が起きると、日帝は武断政治で韓民族を支配することがむつかしいことを悟るようになった。そうして、韓民族の文化と慣習を尊重し、韓民族の利益を大事にするという、いわゆる文化統治を掲げた。日帝はわが民族を懐柔するため、教育の機会を拡大すると宣伝し、ハングルで書かれた新聞の刊行を許可した。そして日本人しか任命されていなかった総督府の役人に韓国人も任命し、憲兵警察制度を普通警察制度に変えて実施し、韓国人に対する弾圧を少なくした。(259) ・このような日帝の新しい政策は親日派を養って民族を仲たがいがいさせ、分裂させようとする狡猾な政策であり、韓民族の団結を押し独立運動をくい止めようとする方針には変わりがなかった。(259) ・斉藤統督は、「朝鮮民族運動に対する対策」(1920年)で親日派を貴族、両班、儒生、富豪、教育者などに浸透させ、その階級と事情によって各種親日団体を組織するなど日派育成案6項目をうち出し、親日派育成に力を注いだ。(259)
--	---

大書	・日本政府は、憲兵警察制度の廃止や、朝鮮語の新聞の発行も許可することになりました。(179)
東書	・三. 一独立運動後、日本は言論、出版、集会の自由などを一部認めたり、教育制度を拡充したりするなどの政策も取り入れました。(175)
扶桑	・朝鮮統督府は、武力でこれを弾圧したが、その後は武力でおさえつける統治のしかたを変更した。(185)

17. 関東大震災における朝鮮人虐殺に関する記述

関東大震災における朝鮮の人々に対する虐殺については、韓国の中学校用国史教科書では扱われていないが、高校世界史領域の教科書で扱われている^{*9}。

教出	・被災家屋は約70万戸、死者、行方不明者は14万人以上に達しました。大混乱のなかで「朝鮮人が暴動をおこした」などさまざまな流言が広がり、住民の組織した自警団や警察・軍隊などによって多くの朝鮮人が殺されるという事件が occurred。また、社会主義者や労働運動家のなかにも殺された人がいました。(159)
清水	・この震災の混乱のなかで、「朝鮮人が暴動をおこす」といううわさがひろがると、警察や軍隊はこれを事実として朝鮮人をとれ、民衆も自警団を組織して朝鮮人や中国人を殺害しました。およそ7000人の朝鮮人、200人の中国人、まきぞえの日本人60人が殺されたといわれています。また、社会主義者や労働運動の指導者も警察や軍隊に殺されました。(187)
大書	・この混乱のなかで、朝鮮人が井戸に毒を投げこんでいるとか、社会主義者が暴動を起こそうとしているとかいったデマが、住民や警察などによって広められ、人々を不安におとしました。住民が組織した自警団や、軍隊・警察によって、数千人の朝鮮人のほか、社会主義者や中国人が捕らえられたり殺されたりしました。(184)
帝国	・混乱のなかで、「朝鮮の人々が暴動をおこす」という根拠のないうわさが流れ、自警団をつくった住民が、朝鮮や中国の人々を殺すという事件も occurred。また社会主義者が迫害され、殺されま

	した。(195)
東 書	・1923(大正12)年9月1日、関東大震災が起こり、東京、横浜を中心とする地域は壊滅状態となりました。被害は、こわれた家25万戸、焼けた家45万戸、死者・行方不明者は14万人に達しました。混乱のなかで、朝鮮人や社会主義者が暴動を起こすという流言が広がり、多くの朝鮮人、中国人や社会主義者などが殺されました。(181)
日 文	・「関東大震災」この混乱の中で、流言が飛び交い、社会主義者や労働運動家のほかに多くの朝鮮人や中国人が殺されるという事件もおきた。(167)
日 書	・数千の朝鮮人や数百の中国人が、軍隊警察や、住民がつくった自警団によって虐殺された。(187) ②この事件は、人々が日ごろ朝鮮人や中国人を差別していたため、そのしかえしをおそれる心から、流言を事実と思いこんでおこしたものと見える。(187)
扶 桑	・朝鮮人や社会主義者のあいだに不穏なくわだてがあるとのうわさが広まり、住民の自警団などが朝鮮人・中国人や社会主義者を殺害するという事件がおきた。(189)

18. 植民地政策に関する記述

韓国の国史教科書では、日本による独島の領土編入、銀行、学校、病院、道路、水道の整備、強制的借款と国債報償運動、教員への制服着用、義兵の海外(中国東北部や沿海州)への脱出、高麗人参・たばこの専売、行政、軍事、司法の日本による独占、土地調査事業(1910~1918)等による土地収奪、東洋拓殖株式会社の役割等、また、日本式姓名強要、軍隊慰安婦等について記載されている。^{*10}

<ul style="list-style-type: none"> ・独島は露日戦争中に日帝に強奪されたが、光復とともに取り戻した。(234) ・特に19世紀末以後日本の侵略が激しくなると、間島に移住するわが国の農民たちの数が増えた。間島に移住したわが民族は間島の各地に生活の基盤を整え、学校を建てて民族教育を実施し、後日の独立運動の基礎とした。(241) ・乙巳条約以後、日本は安東と奉天(瀋陽)間の鉄道施設権を得る大小に、間島を清の領土と認める間島協約を清と締結した(1909年)。こうして間島地域は私たちの管轄から離れていった。(242) ・独島は鬱陵島(ウルルンド)に附属した島で、早くからわが国の領土として連綿と伝わってきた。朝鮮初期に流民を防ぐために鬱陵島島民を本土に移して住ませ、一時政府の管理がなおざりになったが、わが国の漁民たちは漁をする拠点としてずっと利用してきた。(242) ・政府は鬱陵島に官庁を置いて住民の移住を奨励し、独島を管轄した。しかし日本は露日戦争中に一方的に独島を彼らの領土に編入してしまった。(242) ・独立協会が解散した後、政治団体としてまず組織された輔安会は、露日戦争中に日本がわが国の荒野開拓権を強く要求してきたとき、これに反対する国民の世論を喚起する先頭に立った。結局、日本は荒野開拓権をあきらめたが、輔安会は日本の強圧によって解散させられた。輔安会が解散すると、独立協会出身の人々が憲政研究会を組織して日本の侵略に対抗した。彼らは近代的な立憲議会制度を中心とする政治改革を主張した。乙巳(ウルサ)条約以後、統監府により韓国人の政治活動が禁止されると、憲政研究会の中心人物たちは新しく大韓自強会を組織した。大韓自強会は高宗の強制退位に反対する運動を積極的にくりひろげていった。(245) ・政治活動に対する統監府の抑圧が日に日にひどくなって政治団体の活動が困難になると、秘密裏に新民会が組織された(1907年)。新民会は安昌浩(アンチャンホ)、李昇薫(イスンフン)、梁起鐸(ヤンギタク)などが中心となり、主に教師や学生が多く加わった。(246) ・新民会の幹部たちは民族独立の力量を養うため、まだ統監府の監視がおよんでいない満州に独立運動の基地を建設した。新民会は祖国の独立運動に志がある人々を満州の三源堡(サムウォンボ)に移住させて、韓人の集団居住地域を作った。新民会の人々はここに農場を開いて経済力を養う一方、新興(シヌン)学校を建てて民族教育にも力を入れた。また、日本との戦争に備えて軍事学校を建てて若者たちを訓練するなど、独立のための力を養うことに総力を傾けた。(246) ・「105人事件」日帝は新民会を弾圧するため、暗殺の陰謀をたくらんだと事件を捏造して民族指導者数百人を逮捕、投獄し、そのうち105人を裁判に回した。(246) ・乙巳条約が発表されると、『皇城新聞』はこれを強力に非難する張志淵(チャンジョン)の論説を載せて、日本の侵略を糾弾する先頭に立った。(249)

- ・『大韓毎日申報』はイギリス人が発行人として参加し、統監府のひどい統制にもかかわらず、日本の侵略に反対する論説をのせることができた。特に、義兵活動など民族運動に関する記事を載せ、民族の世論を呼び起こすのに大きな貢献をした。(249)
- ・日本の経済侵略によって大韓帝国政府の財政自立は困難だった。(250)
- ・日本はわが国の近代化のための事業という名目で道路や水道施設を整え、銀行、学校、病院などを設立した。こうした施設はわが国に来ている日本人のためのものであるにもかかわらず、これに必要な施設費は私たちの政府が日本政府から借金を得て負担するよう強要した。こうしてわが国は日本に多くの借金をするようになった。国民は愛国啓蒙運動を展開し、日本の干渉からのがれるため、日本からの借金を国民の力で返すべきだと考えた。国債報償運動が徐相敦(ソサンドン)の提案で大邱(テグ)で始まった(1907年)。国債報償期成会が組織され、この運動は全国的に拡大した。これによって国民は禁煙・禁酒をして集めた金と指輪、かんざしなどを募金として抛出し、諸団体と言論機関も募金運動の先頭に立った。この運動は国を救うため経済の自主性を求めようとする民族運動の性格を帯びて展開されたが、統監府の妨害で中止されてしまった。(251)
- ・植民地支配下で韓民族は日帝の経済的収奪にひどい苦痛を被った。この中でもっとも大きい被害は土地を侵奪されたことだった。日帝はわが国の国権を奪った直後、土地の略奪を積極的におし進めた。統督府は、土地所有関係を近代的に整理するという名分をかかげて、いわゆる土地調査事業をおし進めた。(260)
- ・申告を原則としたため、土地申告をきちんと行わなかった多くの人が被害を被ることとなった。すなわち、申告手続きが複雑でややこしく、日帝が実施するものだったため反日感情が先に立ち、これに従わない場合もあった。(261)
- ・民衆の土地や村の人々の公有地、そして王室や公共機関に属していた多くの土地は、持ち主のいない土地と分類され、統督府の所有地となる場合が多かった。統督府はこのように略奪した土地を東洋拓殖株式会社など日本人が経営する土地会社や韓国に渡ってきた日本人に安く譲り渡し、日本人が多くの土地を所有できる条件を整えた。(261)
- ・朝鮮統督府は、会社令を公布して韓国人が会社を設立するときには必ず朝鮮統督の許可を受けると規定した。これは韓国人の企業活動を抑制し、韓国民族資本の成長を抑圧する措置だった。朝鮮人参、塩、タバコなどは専売制度を実施して朝鮮統督府の収入とした。莫大な森林も朝鮮統督府と日本人の所有となり、鴨緑江(アムノカン)や豆満江(トゥマンガン)流域の多くの森林資源が略奪された。金、銀、タングステン、石炭などの鉱山と韓国沿岸の主要漁場も、日本人がほとんど独占的に支配した。(262)
- ・日帝は韓半島で産米増殖計画を実施して、彼らの食糧問題を解決しようとした。これは品種改良、水利施設の拡張などによってコメを増産し、日本にもっていくためのものだった。(262)
- ・そうしてさらに貧しい農民たちが山に入って火田民となったり、慣れ親しんだ故郷を離れ、新しい生活の場を探して満州地域など海外に出ていくようになった。(262)
- ・この戦争を遂行するために、日帝は戦時動員体制を発動して、わが民族を戦場に動員した。そして日帝はわが民族精神を根だやしにするため、いわゆる日鮮同祖論を主張し、内鮮一体と皇国臣民化のスローガンを掲げた。また、韓国語(ウリマル)の使用を禁じ、日本語だけを使わせ、私たちの歴史を教えることも禁じた。ハングルで刊行されていた新聞も廃刊させ、韓国語や歴史の研究も禁止させた。(263)
- ・さらに日帝は私たちの名前までも日本式氏と名前に変えるよう強要し、各地に日本の神社を建てて参拝させ、子どもたちにも皇国臣民の誓詞を覚えるよう強要した。(263)
- ・日帝は韓国人を強制徴用によって連行し、鉱山や工場で辛い労働を強要し、志願兵制度と学徒兵制、徴兵制を実施して多くの青年たちを各地の戦場に追いやった。日帝は女性たちも勤労報国隊、女子勤労挺身隊などの名で連行し、労働力を搾取した。さらに多くの女性を強制的に動員して、日本軍が駐屯しているアジア各地域に送り、軍隊慰安婦として非人間的な生活をさせた。(264)
- ・「軍隊慰安婦」軍隊慰安婦とは韓国、中国、フィリピンなど、日本の植民地や占領地で日本軍によって強制的に戦場に連れて行かれ、性奴隷の生活を強制された女性たちをさす言葉である。1930年代ははじめから行われたこのような蛮行は、1945年に日帝が敗北するまで続いた。(264)
- ・「強制供出された金属類」日帝は1941年金属回収令を公布し、金属を略奪して戦争の武器をつくるのに使用した。(264)

植民地支配の内容について、韓国の教科書は個別項目(国債報償運動など)について具体的に記されているが、日本の検定教科書は、創始改名、土地調査等を中心とし、新興財閥が朝鮮、満州へ進出したこと、創始改名、神社参拝、朝鮮語の公用使用禁止、志願兵、徴兵制、数十万の強制動員、鉱山、同化政策と朝鮮神社の設置、略奪や暴行等について記載されている。

他にも、強制的に炭坑や鉱山で働かされ、これをめぐる戦後補償裁判や謝罪要求が行われている

事実に触れたものもみえる（下線）。

教 出	<p>・土地調査事業をおこない、土地所有権が明確でないとして、多くの朝鮮の農民が土地を失って小作人になったり、満州や日本に移住したりしました。日本に移住した朝鮮人は、賃金や社会生活のうえで、さまざまな差別をうけました。(133)</p> <p>・④朝鮮統監府は、税金（地税）の金額を決めるため、農民に対して土地のもち主を申し出るように命じました。その結果、土地の所有権が不明確だと理由で土地を取り上げられる人々もたくさん出ました。(133)</p>
清 水	<p>・「東洋拓殖株式会社」韓国併合後、統督府は土地調査をおこない、共有地などを「国有地」として、朝鮮の農民の土地をうばい、東洋拓殖など日本の土地会社に安く払い下げた。(168)</p> <p>・さらに朝鮮や台湾にも徴兵制をしいて戦争に動員した。国内の労働力不足をおこなうために朝鮮人や中国人を強制的に連行し、炭坑や鉱山などで働かせた。(203)</p> <p>・日中戦争がはじまったころ、統督府は日本語の使用を強制し、伝統的な姓名にかえて日本式の氏名をつくらせて、公的な場ではこれを使わせるようにし、神社への参拝も義務づけた。この日本の皇民化政策は、長い歴史をもつ朝鮮の文化や社会を根本から破壊するものであり、朝鮮の人びとは深いいきどおりをもった。(203)</p> <p>・日本が植民地としたり、侵略し支配したりした地域は、台湾や朝鮮、中国、東南アジアなどのひろい地域にわたりました。中国のような戦争の相手国でなくても、人びとは日本の戦争にまきこまれました。占領地では日本軍による現地より安い物資の徴発やときには略奪や暴行、強制労働もおこなわれました。朝鮮や台湾には徴兵制がしかれ、それぞれおよそ20万人、2万人が太平洋戦争に動員されました。また、日本本国や樺太などへ労働力として強制的に連行された人びとは、植民地であった朝鮮から約72万人（1939～45年）、占領下にあった中国からは約4万人（1943～45年）にのぼるといわれています。(204)</p> <p>・徴兵制や強制連行などによって、戦地に送られたり、過酷な労働を強いられたりしたのは男性だけではなく、女性も含まれていました。さらに広島・長崎で被爆した朝鮮人、日本軍として占領地で終戦をむかえ、戦争犯罪人とされた朝鮮や台湾の人びともいました。こうした人びとのなかには、個人の立場から日本政府や企業などに謝罪と補償をもとめている人もいます。(204)</p>
大 書	<p>・韓国併合後の朝鮮では、日本による土地調査が行われ、所有権が明確でないとして多くの農民が土地を失い、企業の活動を規制されました。(179)</p> <p>・朝鮮（全羅北道）の土地所有者と所有面積の推移（『朝鮮国経済論』）土地を失った人々は、小作人になったり、日本人よりも低い賃金で働かなければなりませんでした。(179)</p> <p>・朝鮮では、神社をつくって参拝させたり、日本式の姓名を名のる「創氏改名」を強制したりして、日本に同化させる皇民化政策をおし進めました。(195)</p> <p>・日本軍は、東南アジア諸国に、欧米の植民地支配から解放し、アジア諸民族だけで栄えようとする「大東亜共栄圏」を建設しようと宣伝して、約6ヵ月でそのほとんどを占領しました。しかし、実際には、独立を認めないまま石油や鉄などの資源や食料を取り立てて、住民を戦争に協力させました。このため、日本の占領下では、日本軍への期待がしだいに失われ、各地で武力による抗日運動が行われるようになりました。(199)</p> <p>・兵力を補うために、大学生などを徴兵し、朝鮮や台湾でも徴兵制を実施して日本の軍人として戦場に送りました。(200)</p> <p>・朝鮮や中国の占領地から数十万人といわれる人々を強制的に動員して、鉱山や防空壕づくりなどに働かせました。(200)</p>
帝 国	<p>・多くの農民が土地をうばわれたため、小作人となる者や、日本や「満州」へ移住せざるをえない者もいました。(175)</p> <p>・戦争がはげしくなると、日本は総力をあげて戦争を進めるため、植民地であった朝鮮や台湾の人々を「皇国臣民」とする、皇民化政策を行いました。学校では、「国語」として日本語が教えられ、朝鮮語や中国語の使用が禁止されました。また、皇居に向かって敬礼するなど、天皇への参拝も強制しました。さらに朝鮮では、日本式の名前を名のらせる創氏改名も行われました。日本国内で労働力が不足すると、企業などで半ば強引に割りあてを決めて朝鮮人や中国人を集め、日本各地の炭坑・鉱山などに運び、低い賃金で、きびしい労働をおしつけました。日本軍は東南アジアの国々や太平洋の島々でも、物資や食料を強制的にとりたてたり、軍の命令に従わなかった人々を、きびしく処罰したりしました。また、日本語教育などの政策も進められたので、これらの地域でも、抗日運動がおこりました。(209)</p> <p>・「朝鮮神宮（ソウル）」皇民化政策の一つとして、朝鮮の各地に神社が建設されました。(209)</p> <p>・①名前をかえるだけでなく、夫婦が別姓の朝鮮人にとっては、同姓を名のることになり、日本の</p>

	<p>家族制度が朝鮮にももちこまれることになりました。(209)</p> <p>・台湾や朝鮮でも徴兵が実施されました。(210)</p>
東 書	<p>・土地制度の近代化を名目として日本が行った土地調査事業では、所有権が明確でないとして多くの朝鮮農民が土地を失いました。こうした人々は、小作人になったり、日本や満州へ移住することを余儀なくされたりしました。(161)</p> <p>・軍需と政府の保護によって重化学工業が大きく発展し、軽工業の生産をうわ回りました。化学工業などでは新しい財閥が急成長し、朝鮮、満州にも進出しました。(187)</p> <p>・朝鮮では、皇民化の名のもとに、日本語の使用や姓名のあらわし方を日本式に改めさせる創氏改名をおし進めました。さらに志願兵制度を実施し、朝鮮の人々も戦場に動員しました。「皇民化」は台湾でも進められました。(189)</p> <p>・「動員された朝鮮の若者たち」朝鮮では、1938年に、陸軍の志願兵制度がつけられました。(189)</p> <p>・日本に連れてこられて、意思に反して働かされた朝鮮人、中国人などもおり、その労働条件は過酷で賃金も低く、きわめてきびしい生活をしいるものでした。(193)</p>
日 文	<p>・朝鮮の人々は、祖国を失い、同化を強制され、満州や日本への移住を余儀なくされた。(140)</p> <p>・植民地の台湾や朝鮮では、兵士の募集がはじまり、宮城（東京の皇居）や神社に向かっておがむことや、固有の姓名を日本式に変えさせられた（創氏改名）。植民地の人々は、戦争下にあつて、「天皇の民」にふさわしい、皇国の臣民となるように同化を強要された。(177)</p> <p>・日本はこの戦争を欧米の植民地からのアジアの民族を解放するための戦争と位置づけ、大東亜戦争とよんだ。しかし植民地の独立を認めず、占領下の住民を労働者として徴発した。朝鮮から約70万、中国から約4万人の人々が労働力不足を補うために日本に連れてこられ、炭鉱などで過酷な労働に従事させられた。(183)</p>
日 書	<p>・統督府は土地の所有者の調査を進めたが、その結果、土地は進出した日本人や朝鮮人の有力者のもとに集められていった。そのため多くの農民が土地を失い、生活にこまった人々は、日本や満州などに移住するようになった。日本国内では、賃金や社会生活のうえで朝鮮人に対する差別が生まれ、朝鮮人を軽蔑する意識も強くなっていった。一方、併合に反対する朝鮮人の抵抗は、その後も根強くつづけられた。(163)</p> <p>・朝鮮や台湾では日本への同化を強制する皇民化政策が進められ、特に朝鮮では、日本式の姓名を名のらせる創氏改名や神社への参拝が強制された。(199)</p> <p>・しかし、このようなスローガンには説得力がありませんでした。アジア人のアジアをかかげながら、アジアの大国、中国とは長い間、戦争状態にありました。それに植民地支配からの解放をいいながら、日本自身が朝鮮・台湾を手ばなそうとしなかったからです。(202)</p> <p>・日本国内の労働力をおぎなうため、朝鮮や中国の占領地からは、多くの人々が内地に強制的につれていかれました。強制連行された朝鮮人の数は約70万人、中国人の数は4万人とされています。また軍の要請によって、日本軍兵士のために朝鮮などアジアの各地から若い女性が集められ、戦場に送られました。「大東亜共栄圏」はたんなる宣伝のためのスローガンにすぎなかったのです。(202)</p> <p>・1943年には朝鮮に、1944年には台湾に徴兵制がしかれた。(205)</p>
扶 桑	<p>・韓国の国内には、民族の独立を失うことへのはげしい抵抗がおこり、その後も、独立回復の運動が根強く行われた。韓国併合のあと置かれた朝鮮統督府は植民地政策の一環として、鉄道・灌漑の施設を整えるなどの開発を行い、土地調査を開始した。しかし、この土地調査事業によって、それまでの耕作地から追われた農民も少なくなく、また、日本語教育など同化政策が進められたので、朝鮮の人々は日本への反感を強めた。(170～171)</p> <p>・日本の占領地域では、日本語教育や神社参拝などをしたことに対する反発もあった。連合軍と結んだ抗日ゲリラ活動もおこり、日本軍はこれにきびしく対処し、一般市民も含め多数の犠牲者が出た。また、戦争末期になり、日本にとって戦局が不利になると、食糧が欠乏したり、現地の人々が過酷な労働に従事させられる場合もしばしばおきた。(207)</p> <p>・このため敗戦後になって、日本はこれらの国々に賠償を行った。そして、大東亜共栄圏の考え方も、日本の戦争やアジアの占領を正当化するためにかかげられたと批判された。(207)</p> <p>・朝鮮半島では、日中戦争開始後、日本の姓名を名乗らせる創氏改名などが行われ、朝鮮人を日本人化する政策が強められた。また、多数の朝鮮人や中国人が、日本の鉱山などに連れてこられ、きびしい条件のもとで働かされた。(208)</p>

19. 反日抵抗運動に関する記述

韓国の国史教科書では、大韓民国臨時政府、亡命政府の存在、連合軍とともに日本に宣戦布告し

た事実、朝鮮独立同盟、ハンブル新聞の使用禁止、歴史研究への弾圧等について記述されている。

- ・3・1運動はわが民族の目標が完全な自主独立であることを確認させ。これをきっかけにわが民族の独立運動は国内外でさらに多様な展開をみせ、その結果大韓民国臨時政府が樹立された。(270)
- ・すでに3・1運動が起こる前に沿海州に大韓光復軍政府が組織されて活動していたが、政府樹立運動が本格化したのは3・1独立運動を通してだった。(270)
- ・漢城(ハンソン)政府をはじめ、中国の上海には大韓民国臨時政府が組織され、アメリカなどでも臨時政府の樹立をおし進めた。沿海州でも大韓国民議会という議会中心の臨時政府が組織された。(272)
- ・大韓民国臨時政府は自由民主主義と共和政を基本にした国家体制を整え、大統領制を採択して李承晩(イスマン)を初代大統領に選出した。その後臨時政府は何度かにわたった憲法を改正しながら変遷し、金九(キムグ)が主席となって光復まで臨時政府を率いた。(272)
- ・臨時政府は金奎植(キムギョシク)をパリ講和会議に民族代表として派遣して韓国の独立を主張し、アメリカに欧米委員部を設置してアメリカの政府や国民に韓国の独立を訴えた。(272)
- ・日帝に対抗して国内でおし進められた民族教育運動と武装義兵活動は、日帝の武断統治によって衰退せざるをえなかった。そして日帝の手があまりおよばない豆満江(トゥマンガン)の対岸の龍井、延吉、琿春などの韓民族集団居住地域が抗日民族運動の中心地となった。(276)
- ・日本軍は独立軍の活動をくい止めるために大韓独立軍を始めいくつかの独立軍部隊が駐屯していた鳳梧洞を襲撃した。洪範図(ホンボムド)が率いる大韓独立軍などはこれにあらかじめ備え、日本軍を迎え撃って大勝利を収めた。これが鳳梧洞戦(ボンオドン)である(1920年6月)。(277)
- ・金佐鎮(キンジャジン)が率いる北路軍政署軍をはじめさまざまな独立軍部隊は、三道溝にある青山里(チョンサルリ)一帯に集結して日本軍を迎え撃つ準備を整えた。日本軍大部隊と戦闘が行われると、独立軍は地形をうまく利用した効果的な作戦と命を惜しまない闘志によって、6日間の激戦の末に日本軍を打ち破った。これが青山里(チョンサルリ)大捷である(1920年10月)。(277)
- ・3・1運動以後、ロシアのウラジオストクで組織された大韓老人団の団員である姜宇奎(カンウギョ)は、65歳の老人の身で韓国内に入り、新しく赴任する齊藤総督にソウル駅で爆弾を投げつけた。姜宇奎義士の義挙は成功を収められなかったが、日帝にわが民族の意思を伝えることができた。(278)
- ・金九(キムグ)が率いた韓国愛国団の団員李奉昌(イボンチャン)は、1932年に日本の東京で韓国侵略の元凶である日本国王「天皇」を処断するために国王の馬車に爆弾を投げつけたが、成功しなかった。一方、同じ韓人愛国団員の尹奉吉(ユンボンギル)は上海の虹口公園(現在は魯迅公園)で開かれた日本軍の上海占領祝賀記念式場に爆弾を投げつけて日本軍をこらしめた。(279)
- ・大韓民国臨時政府はこれら独立軍を土台として韓国光復軍を結成した(1940年)。(280)
- ・日帝が太平洋戦争を起こすと、大韓民国臨時政府は日本に宣戦布告をし、連合軍とともに独立戦争を展開した。(281)
- ・1938年に金元鳳(キムウォンボン)を中心として組織された朝鮮義勇隊は中国軍と協力し、日帝に対抗して戦い、一部は韓国光復軍に合流した。しかし、韓国光復軍に合流しなかった残りの人々は、中国華北地方で社会主義系独立運動家とともに、1942年に朝鮮独立同盟を組織し、朝鮮義勇軍と名前を変えて抗日運動を継続した。(281)
- ・以上のように、わが民族の積極的な独立戦争は各国に知られ、世界列強は韓国の独立問題に関心を持つようになった。そうして連合国首脳が集まったカイロ会談(1943年)とポツダム宣言(1945年)で、韓国の独立を約束する土台が築かれた。(281)
- ・日帝の韓国人に対する教育差別に対抗して、わが民族の力で大学を設立しようとする私立大学設立運動が起きた。李商在(イサンジェ)などが中心となって私立大学設立期成会を組織し、全国的に募金活動をくり広げた。各級学校の学生は、休みを利用して農民の啓蒙に立ち上がった。彼らは読み書きのできない人を少なくするため夜学や講習所を建てて、ハンブルを普及させ、民族意識を高めることに力を注いだ。(286)
- ・わが国の言論の活動に対して日帝は検閲、記事削除、休刊および停刊など多くの弾圧を加えた。(287)
- ・「南宮憶(ナムグンオク)の愛国教育運動」この歌は翰西南宮憶が書いた「仕事をしにいこう、三千里の山河のために」である。この歌は日帝下で広く流行し、光復後も村ごとにこの歌声が聞こえた。1937年に日帝警察はこの歌を歌えないようにした。(287)
- ・学生たちは日帝の民族差別教育に反対し、日本人教師の韓国人学生蔑視に抵抗する同盟休校運動を展開したりした。学生たちが起こした抗日民族運動で代表的なものは、6・10万歳運動や光州学生抗日運動である。(288)
- ・大韓帝国最後の皇帝だった純宗(スンジョン)の葬儀の日である1926年6月10日、葬儀の行列が通り過ぎる中、学生たちが万歳デモを始めた。これに呼応して道路に出てきた市民が結集したが、日帝の武装警察によって無慈悲に制止された。(288)
- ・1929年11月3日、全南光州で韓日の学生の間に起きた衝突をきっかけに、普段の民族差別に対する怒りと反日感情が爆発して大規模な反日学生デモが起きた。これはあつという間に全国に広まり、各地で多くの学生た

<p>ちが抗日デモをくり広げ、一般国民まで加わった。この運動が全国的な民族運動として展開したのは、1927年に結成された新幹会の活躍が大きかった^{*11}。(289)</p> <p>・朝鮮語学会の国語研究とハングル普及活動は、日本語を強要していた日帝に対抗して民族精神を高め、民族文化の伝統を継承しようとする民族運動の性格を帯びて展開された。日帝は民族抹殺政策を実施し、朝鮮語学会が独立運動をしているという口実で会員を逮捕し、強制的に解散させた。このとき、激しい拷問で命を失った会員もいた。(290)</p> <p>・日帝末期には、学校で韓国の歴史を教えることが一切禁止された。歴史教科書は日本の歴史を美化した内容に限られていた。しかし、愛国の志士たちは夜学などを通して秘密裏に青少年に韓国の歴史を教え、教師の中には日本の警察の監視を避けながら、韓国の歴史と伝統文化を教える者もいた。(291)</p> <p>・カトリックやプロテスタントも早くから社会事業と民衆啓蒙に努めてきたが、特に日帝が強要する神社参拝に抵抗して、多くの教会指導者が投獄される犠牲を被った。(291)</p> <p>・宗教団体はそれぞれ学校を設立して教育活動を通じた民族意識と抗日精神を育てることに貢献した。(292)</p> <p>・「南山の朝鮮神宮」日帝は私たちの民族精神を抹殺するため神社参拝を強要した。(292)</p> <p>・日帝の侵略戦争が拡大し、民族抹殺政策が実施され、文学活動も弾圧されて大きく後退したが、尹東柱(ユンドンジュ)、李陸史(イユクサ)、李相和(イサンファ)などは民族の魂を説く作品を発表した。一方、映画では羅雲奎(ナウンギョ)が民族の抵抗意識と韓国的情緒を映画に刻み込み、韓国映画芸術の発展に寄与した。美術では、李仲燮(イジョンソプ)の活動が特に目立ち、日本に売り渡されようとするわが文化財を収集して民族文化を守る努力を傾けた人もいた。音楽では「鳳仙花」、「故郷の思い」、「半月」など民族的感情が込められた作品が発表された。これらの歌は同胞が好んで愛唱し、失われた国を取りもどそうとする心とともに、民族の精神的団結を強めるのに役立った。(292)</p>
--

日本の検定教科書においては、植民地化の抵抗運動については、下記の点が認められる他は、ほとんど触れられていない。

清 水	<p>・植民地とされた朝鮮では、ハングルの改良や歴史の研究などによって文化面で日本の支配に抵抗した。(203)</p>
大 書	<p>・日本の植民地であった朝鮮や台湾でも、社会不安が高まりました。朝鮮では、1929年に日本人学生の侮辱的な言動に抗議して光州学生事件が起こり、翌年、台湾でも、霧社という地域の住民が労役に反対して、日本人の警察や学校をおそいました。日本政府は軍隊を動員してこれをしずめました。(191)</p> <p>・①1929年から翌年にかけて、朝鮮人学生が、学校を集団で休んだり、反日デモを行ったりしました。(191)</p>

20. 日本の敗戦（光復）、朝鮮戦争（6・25戦争）に関する記述

戦後の韓国史においては、日本の敗戦（光復）に関する記載の他は、日本に関する記載は極端に少ない。国史教科書において、朝鮮戦争（6・25戦争）に関する記述でも、日本との関係については、ほとんど記されていない。

<p>・1945年8月15日、日本の降服で第2次世界大戦が連合国の勝利に終わると、わが民族は日帝の過酷な植民統治から抜け出して、夢に描いてきた光復を迎えた。(299)</p> <p>・国内でのねばり強い独立運動、満州や沿海州、中国大陸などでの抗日武装闘争、大韓民国臨時政府の外交活動と韓国光復軍の対日抗戦、国内外で起こしたわが民族の相次ぐ義挙活動などが光復の基礎となった。(299)</p> <p>・「カイロ会談」(1943年11月) 韓民族の奴隷状態に留意して「適当な時期に韓国を独立させる」と決定したが、「適当な時期」がいつなのかを明言しなかったため問題となった。(299)</p> <p>・8・15光復で外国に亡命して独立運動をしていた愛国の志士たちが帰国し、また日帝によって軍隊、工場、鉱山などに強制的に連れていた数多くの同胞も故国に戻ることができるようになった。(300)</p> <p>・1945年8月ソ連軍の北韓進出について、アメリカ軍も9月はじめに南韓(ナマン)に進駐し、残っていた日本軍</p>
--

の武装を解除した。38度線はこのように、はじめは米ソ両国によって引かれた単純な軍事的境界線だった。しかし、第2次世界大戦以後アメリカを中心とした自由陣営と、ソ連を中心とした共産陣営の対立が激しくなり、両陣営間の関係が悪化し、38度線は次第に政治的な分割線に変わっていった。(301)

- ・1945年12月にモスクワでアメリカ、イギリス、ソ連の三国外相会議が開催された。この会議では韓国に臨時政府を樹立するため、設置し、韓国に対して最高5年間アメリカ、イギリス、中国、ソ連の四カ国が信託統治を実施することを決定した。(302)
- ・1948年12月にパリで開催された国連総会は、大韓民国が韓半島で唯一の合法政府であることを絶対多数で承認した。これで大韓民国は国際的に正当性が認められるようになり、自由友邦の支持を受けて民主主義国家に発展できる土台を整えた。(305)
- ・北韓は南侵準備を急ぎながらも表面では南韓に対して平和攻勢をかけて南侵の意図を隠しつつ1950年6月25日夜明けに38度線の全域にわたって南侵を敢行した。(306)
- ・北韓共産軍の侵略が始まると、緊急招集された国連安全保障理事会は北韓を侵略者と規定し、共産軍の撤収を要求する一方、国連軍の韓国派兵を決議した。国軍と国連軍は仁川上陸作戦をきっかけに反撃を試み、1950年9月28日にはソウルを取り戻し、この機会に統一を実現するという考えから共産軍を追って北韓地域に進撃した。(307)
- ・その後激しい攻防戦が続いたが、休戦会談が成立して休戦となった(1953年7月)。(308)
- ・北韓が引き起こした6・25戦争は自由と平和に対する挑戦であり、同族相残の悲劇だった。この戦争によって数多くの人々が生命と財産を失った。戦争による南韓の死傷者数だけでも150万人に達し、数多くの戦争孤児と離散家族が発生した。(308)

日本の検定教科書では、朝鮮戦争に関して、死者が民間人300万以上、軍人57万人に及んだこと、日本から掃海艇が出動し、兵器の修理等がなされた事、特需・軍需景気、冷戦及び自衛隊の創設等との関係が説明されている。

教 出	<ul style="list-style-type: none"> ・国民は終戦を翌15日の天皇のラジオ放送によって、初めて知ることになりました。また、朝鮮をはじめ日本の植民地や占領地の人々は解放されました。(175) ・日本から独立した朝鮮とは、北緯38°線を境に、南はアメリカ軍、北はソ連軍に占領され、その後、南には大韓民国(韓国)、北には朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)がつくられ、きびしく対立しました。こうした冷戦のあらわれを背景に、連合軍総司令部による占領政策の重点は、日本を「アジアの共産主義に対抗する勢力」に育てることに転換していきました。総司令部は、共産党の活動を制限するいっぽう、戦争中に重要な地位にあった人の追放を解除しました。(185) ・冷戦は、朝鮮半島で火をふきました。1950年6月、北朝鮮が武力統一をめざし、ソ連の支援をうけて南下したことをきっかけに朝鮮戦争がはじまりました。国連は、北朝鮮への制裁を決め、アメリカ軍を主力とする国連軍を出動させました。その後、中華人民共和国が参戦し、北朝鮮を援助しました。戦争は、1953年に休戦協定が成立するまでつづきました。アメリカは、朝鮮戦争のために日本本土や沖縄の米軍基地をつかって出兵しました。また総司令部の指令によって、現在の自衛隊のもとである警察予備隊がつくられました。(185) ・1950年につくられた警察予備隊は保安隊を経て、1954年に自衛隊となり、同年防衛庁が設置されました。(185)
清 水	<ul style="list-style-type: none"> ・満州事変から15年たってようやく戦争は終わった。日本は、このみずからおこした侵略戦争によって悲惨な体験をし、また、戦った中国や東南アジア、欧米の国ぐにだけでなく、戦争に動員した朝鮮・台湾などの人びとにも、大きな被害と深い傷あとを残した。(207) ・「解放をよるこぶ朝鮮の独立運動家」日本の降服と同時に朝鮮の人びとは長かった日本の統治から解放された。(207) ・朝鮮は、1945年8月に日本の植民地支配から解放されたが、北緯38°線を境に、南はアメリカ軍、北はソ連軍に占領された。1948年には、南に大韓民国、北に朝鮮民主主義人民共和国が成立した。(214) ・1950年に朝鮮民主主義人民共和国は、ソ連の軍事力を背景に南進をはじめました。アメリカは国連軍の中心として大韓民国を全面的に支援し、東西の対立は戦争(朝鮮戦争)へと発展しました。核戦争となる危険もありましたが、1953年に休戦協定がむすばれて、いちおうの終結をみました。(216) ・「二つの世界」の対立はアジアにもおよんだ。1950年、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)が南進して大韓民国(韓国)とのあいだに戦争(朝鮮戦争)がはじまると、アメリカ軍(国連軍)は韓国を、中華人民共和国は北朝鮮を支援して、はげしい戦いがつづいた。1953年には休戦となったが、この戦

	<p>争のあいだ、日本にはアメリカ軍の軍需品の生産・修理・輸送などの注文が殺到し、日本経済は好景気（特需景気）となって、これをきっかけに経済は上向きとなった。(218)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮戦争がおこると総司令部は、日本政府に在日米軍の朝鮮出動にともなう空白をおぎなうため、警察力の強化を求めた。これを受けて、警察予備隊がつくられた。アメリカは、日本を資本主義国家群の一員として自立させ、自衛力をもたせようとしたのである。また、日本でも主権の回復がのぞまれ、朝鮮戦争中の1951年9月、サンフランシスコで講和会議が開かれて、日本と48カ国とのあいだにサンフランシスコ平和条約が調印された。(218～219) ・①朝鮮戦争がおこると、国連安全保障理事会は、ソ連が欠席したままに北朝鮮を侵略者としてきめ、武力制圧のための国連軍をおくことにした。国連軍はアメリカ軍を中心に編成された。(219)
大書	<p>・日本の敗北により植民地から解放された朝鮮では、北緯38度を境に北をソ連に南をアメリカに占領されました。1948年、アメリカの援助で南部に大韓民国（韓国）が成立し、次いでソ連の支援で北部に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）がつくられました。この両国はだいに対立し、1950年、北朝鮮が韓国に侵攻して朝鮮戦争が始まりました。平和を望む国際世論が高まるなか、1953年に休戦協定が結ばれました。(217)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮戦争」アメリカ軍を主力とする国連軍が韓国を支援して参戦し、中国が義勇軍を送って北朝鮮を支援すると、38°線付近で一進一退をくり返すようになりました。(217) ・朝鮮戦争が起こると、アメリカは、日本の本土や沖縄の米軍基地を使い、大量の物資を日本に発注しました。そのため、日本の経済は好景気になり、復興が早められました。また、アメリカは、朝鮮にアメリカ軍が出動したあとの日本国内の治安を維持するためという理由で、1950（昭和25）年、日本政府に警察予備隊をつくらせました。そして、これがのちに強化されて、1954年には自衛隊となりました。(218) ・アメリカは、朝鮮戦争でアジアの緊張が高まると、日本との講和を急ぐようになりました。これを受けて政府は、1951年、サンフランシスコの講和会議で、アメリカ・イギリスなど48カ国とのあいだに、サンフランシスコ平和条約を結びました。(218～219)
帝国	<p>・日本の植民地とされた朝鮮や台湾、日本軍に占領されていた中国や東南アジアの人々は、解放を喜びました。(214)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦地からもどってきた兵士や「満州」・朝鮮・台湾などから引きあげた人々なども加わって、1945年末には失業者は600万人をこえると予測されました。(215) ・朝鮮は、日本の植民地支配から解放されましたが、アメリカとソ連により南北に分断され、1948年には、南の大韓民国（韓国）と北の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が成立しました。1950年6月、北朝鮮軍が朝鮮を統一しようと北緯38度線をこえたため、朝鮮戦争がはじまりました。その後、アメリカ軍を中心とする国際連合軍が韓国を支援し、北朝鮮には中国の義勇軍が加わりました。朝鮮戦争は、激しい戦闘の末、1953年に休戦協定が結ばれました。朝鮮戦争がはじまると、連合国軍総司令部は、日本政府に指示して、治安維持のための警察予備隊（のちの自衛隊）をつくらせ、さらに、労働運動を制限されるなど、民主化政策を修正していきました。こうして、日本も冷戦のなかに組みこまれていきました。しかし、朝鮮戦争の間にアメリカ軍が日本の基地を使用し、日本が軍事物資などの生産を引き受けたこと（特需）で、経済の復興が進みました。(223)
東書	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカは、原子爆弾を8月6日広島に、9日長崎に投下しました。その間、ソ連も日ソ中立条約を破って参戦し、満州・朝鮮に侵攻してきました。(195) ・日本が占領した東南アジア諸国や、朝鮮・台湾などの日本の植民地は解放され、独立に向かいました。(195) ・アジア各国の犠牲者は合計で約2000万人以上といわれています。(195) ・朝鮮は、植民地から解放されましたが、北緯38度線を境に北をソ連に、南をアメリカに占領され、1948年には、北に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が、南に大韓民国（韓国）が成立しました。1950年、北朝鮮が韓国に侵攻して、朝鮮戦争が始まりました。アメリカ中心の国連軍が韓国を、中国の人民義勇軍が北朝鮮をそれぞれ支援し、戦争は、1953年に休戦協定が結ばれるまで続きました。(207) ・「朝鮮戦争」避難する住民と前線に向かうアメリカ兵。(207) ・朝鮮戦争が始まると、日本本土や沖縄のアメリカ軍基地が使用され、大量の軍需物資の調達も日本で行われるようになりました。そのため日本経済は好景気をむかえ（特需景気）、経済復興が早まりました。在日アメリカ軍が朝鮮戦争に出動すると、GHQの指令で警察予備隊がつくれ、それがしだいに強化されて1954（昭和29）年には自衛隊となりました。(208) ・「戦争を修理する工場」戦争では、日本で砲撃や食糧などの物質が調達され、戦争で使われた兵器の修理も行われました。(209)
日文	<p>・翌15日に天皇がラジオ放送で日本の降伏を国民に伝えた。この日は、日本の植民地であった台湾や朝鮮、日本に占領された中国などの人々にとって民族解放の日となった。(185)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・「解放をよるこぶ朝鮮の人々」(185) ・朝鮮は、日本の支配をはなれたが、北緯38度線を境として、南がアメリカ、北がソ連に、それぞれ占領された。1948年、南に大韓民国(韓国)が、北に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)ができた。(201) ・「避難する人たち 1951年8月」3年間の戦争で、朝鮮半島の南北の住民は、戦火に追われて、大きな犠牲を払った。(202) ・1950年6月、北朝鮮は武力による統一をめざして南下し、北緯38°線をこえて韓国の軍隊と衝突した。ついに冷戦は、朝鮮半島で熱い戦争となった(朝鮮戦争)。人々は、上の写真のように、戦火のがれて避難した。国連の安全保障理事会は、ソ連の欠席する中で、北朝鮮を侵略国として決議し、アメリカを主力とする国連軍を韓国に派遣した。中国は、国連軍が中国国境までせまると北朝鮮に義勇兵を送った。朝鮮半島全域ではげしい戦いがつづいた。北緯38°線を中心に一進一退の戦いがくり返され、1953年、ようやく休戦協定が成立した。国連軍は戦争がはじまると、朝鮮半島へ出動するための前線基地を日本におき、大量の軍需品などを日本で調達した。そのため日本は、特需景気とよばれる好景気をむかえ、戦後のひどい不景気からぬけ出した。アメリカは朝鮮戦争がおこると、日本を早く独立させて西側の一員とするために、日本との講和を急いだ。(203) ・条約の締結で、日本は朝鮮の独立を認め、台湾、樺太、千島列島などを放棄し、小笠原諸島、沖縄諸島をアメリカの管理にゆだねた。(203)
日 書	<ul style="list-style-type: none"> ・この戦争での日本人の死者は、軍人・民間人を合わせて約310万人(朝鮮人・台湾人5万人をふくむ)、アジア諸国の死者は、中国だけでも1000万人をこえるといわれる。(207) ・朝鮮は、北緯38度線の南はアメリカに、北はソ連に占領された。南は大韓民国(韓国)、北は朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)としてそれぞれ独立した。(222) ・ドイツと同じように南北に分断されていた朝鮮では、朝鮮民主主義共和国が武力による統一をくわだて、1950年6月に大韓民国に侵攻して朝鮮戦争がはじまった。アメリカ軍を中心とする国連軍は韓国を支援して参戦し、中国も北朝鮮を支援して義勇軍を送ったため戦争は長期化し、1953年に休戦協定が結ばれるまで一進一退の戦闘がつづいた。(223) ・この戦争での朝鮮人の死者は民間人300万人以上、軍人55万人とされている。また多数の家族が南北に離散することになった。(223) ・さらにアメリカは朝鮮戦争がはじまると、警察予備隊の設置を日本政府に命じた。また大量の軍需物資を日本で買いつけたため景気が回復し、政府の積極的な財政政策もあって、日本経済は1950年代の中ごろまでに戦前の水準をこえた。(223) ・1951(昭和26)年9月、日本は連合国48カ国との間でサンフランシスコ平和条約を結んだ。これにより日本は朝鮮の独立を認め、台湾・南樺太・千島列島を放棄し、沖縄や小笠原諸島は引きつづきアメリカの管理下におかれた。アメリカは日本との関係を強めるため、賠償の支払いを求めず、多くの国もこれにしたがった。また、戦争の最大の被害国であった中国や朝鮮は会議に招かれず、ソ連などは条約に反対して調印をしなかった。(224) ・「朝鮮戦争の特需」朝鮮戦争のための軍需物資の調達と修理が日本でおこなわれた。(223) ・朝鮮戦争のとき、日本は、米軍の重要な出撃基地の後方基地となりました。それだけでなく、米軍の命令で機雷の処理にあたる掃海部隊が朝鮮に出動し、死傷者を出しています。(236)
扶 桑	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島では1948年、南部にアメリカが支持する大韓民国、北部にソ連の影響下にある朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)がつくられ対立した。こうして冷戦は東アジアへと広がった。(216) ・1950年6月、北朝鮮は、南北の武力統一をめざし、ソ連の支持のもと突如として韓国へ侵攻した。韓国軍と、マッカーサーが指揮するアメリカ軍主体の国連軍がこれに反撃したが、戦況は一進一退をくり返し、戦争は1953年に休戦協定が結ばれるまで続いた(朝鮮戦争)。日本に駐留するアメリカ軍が朝鮮に出動したあとの治安を守るために、日本はGHQの指令により警察予備隊を設置した。また、日本はアメリカ軍に多くの物資を供給し、日本経済は息を吹き返した。(朝鮮特需)(217) ・朝鮮戦争をきっかけに、アメリカは、基地の存続などを条件に、日本の独立を早めようと考えた。(217)

21. 日韓基本条約及び条約以後に関する記述

日韓基本条約及び条約以後の歴史については、韓国の国史教科書では、下記のほか日本に関する記述はほとんど見られない。

<p>・朴正熙政府は祖国の近代化を掲げ、工業化を第一の課題とする成長中心の経済政策を積極的におし進めていった。また、朴正熙政府は民主友邦との結びつきを強化する一方、中立国と外交関係を樹立するため努力するなど、積極的な外交活動を展開した。そうして長い間宿題となっていた日本との関係を改善して韓日協定を締結し、ベトナムに国軍を派遣した。(313)</p> <p>・6・25戦争という同族相残の悲劇を体験した後も、南韓（ナマン）と北韓（ブッカン）の武力対決状態が続いた。分断状況で互いに相手の存在を認めず、不信に思っていたからだった。南北間のこのような極端な対立状態は、1960年代末まで続いた。しかし国際情勢は大きく変化した。アメリカは緊張緩和政策を追求し、中国との関係を改善し、日本も中国との国交を正常化した。(322)</p>

日本の検定教科書では、日韓基本条約について説明し、国家賠償請求の放棄に言及した教科書の記載（下線）もみえる。

教出	<p>・1960年以降、日本と韓国・中国との関係に変化が生まれました。1965年（昭和40）年、日本は韓国と日韓基本条約を結び、韓国政府を朝鮮半島にあるただ一つの合法的な政府と認め、経済協力をおしすすめました。しかし、北朝鮮との国交ははまだひらかれないままになっています。(194)</p> <p>・韓国と北朝鮮は、1991年に国連に同時に加盟しました。2000年には、韓国の大統領が北朝鮮を訪問して、南北首脳会談が実現し、東アジアの安定につながる動きとして注目されました。(199)</p>
清水	<p>・1965年、日本は大韓民国を朝鮮にある唯一の合法政府として日韓基本条約に調印した。いっぽう、朝鮮民主主義人民共和国とのあいだは、国としての関係を閉ざされてきた。(222)</p>
大書	<p>・1965年6月、政府は大韓民国とのあいだに日韓基本条約を結びました。両国の関係を正常化しようという日韓会議は、アメリカのあっせんでは1952年に始まり、一時中断をはさみながら7次にわたって行われ、条約の締結までには13年を要しました。条約のなかで、政府は大韓民国政府が朝鮮にある唯一の合法的な政府であると認め、経済協力などを約束しました。こうして、日本・韓国・アメリカの政府間の結びつきが強まりました。(222)</p>
帝国	<p>・1965（昭和40）年、日本は大韓民国と日韓基本条約を結び、国交を正常化しました。しかし、朝鮮民主主義人民共和国とは、まだ国交がありません。(228)</p>
東書	<p>・日本は、1965年、韓国と日韓基本条約を結び、韓国政府を朝鮮半島にある、ただ一つの合法的な政府として承認しました。(211)</p>
日文	<p>・日本は1965年に日韓基本条約を結んだ。(208)</p>
日書	<p>・国交の正常化がおこなわれていた韓国との間では、アメリカの強い後押しもあって、1965年に日韓基本条約がようやく成立した。この条約によって、日本は韓国を朝鮮にあるただ一つの合法的な政府として承認し、経済協力を約束したが、北朝鮮との間にはいまだに国交が開かれていない。(227)</p> <p>・一方、ソ連は1956年の日ソ共同宣言で、中国の1972年の日中共同声明で、それぞれ賠償支払を求めないことを決めました。また、韓国も1965年の日韓基本条約で同様のことを決め、その代わりに日本政府が経済援助をおこなうことになりました。(231)</p>
扶桑	<p>・1965（昭和40）年には、日本は韓国と日韓基本条約を結んで国交を正常化し、有償2億ドル、無償3億ドルの経済協力を約束した。(221)</p>

22. 「在日韓国人」「戦後補償」「拉致問題」に関する記述

日本の教科書にのみ記載されている内容として、①在日韓国・朝鮮人の人権に関する記述、②戦後補償に関する記述、③拉致問題に関する記述がある。

①在日韓国・朝鮮人の人権に関する記述

清水	<p>・とくに在日韓国・朝鮮の人びとについては、これまでの歴史の正しい認識をふまえて、差別や偏見をなくすことが必要である。(227)</p>
----	--

帝国	・日本の植民地政策などにより、第二次世界大戦の終戦時に日本にいた朝鮮人は、およそ200万人ほどといわれています。大半の人々は、終戦後すぐに朝鮮半島へ帰国しましたが、なかには仕事や家族のことなどで日本に残留する人も60万人ほどいました。残留した人々は、戦後の法律によって外国人とされ、「日本国籍」がなくなりました。残留した人々は、差別的ななかでくらしています。(225) ・日本国内にも解決すべき問題が多くあります。部落差別、アイヌの人々や在日コリアンへの差別・男女共同参画の実現などは、基本的な権にかかわる重大な問題です。(233)
東書	・部落差別の撤廃は、国や地方公共団体の責務であり、国民的な課題です。在日韓国・朝鮮人やアイヌの人々、外国人労働者などへの偏見や差別をなくすことも、日本人一人ひとりの課題です。(214)
日文	・アイヌ民族、在日韓国・朝鮮人に対する差別あるいは、障害者、男女差別の問題もなくなっていない。(213)

②戦後補償に関する記述

教出	・サンフランシスコ平和条約(→p186)および各国との賠償協定によって、日本政府は「国家間の補償問題は完全に解決済み」としています。しかし、戦争時に日本軍の行為で被害をうけた個人に関しては、現在でもアジア諸国から、日本の加害について補償を求める動きがつついています。(183)
清水	・徴兵制や強制連行などによって、戦地に送られたり、過酷な労働を強いられたりしたのは男性だけではなく、女性も含まれていました。さらに広島・長崎で被爆した朝鮮人、日本軍として占領地で終戦をむかえ、戦争犯罪人とされた朝鮮や台湾の人びともいました。こうした人びとのなかには、個人の立場から日本政府や企業などに謝罪と補償をもとめている人もいます。(204)
帝国	・日本が太平洋戦争中、植民地支配を行っていた国々への補償・賠償について、政府は講和条約などで決着済みとし、個人補償の請求はこれを退けてきました。しかし、戦時下における朝鮮や中国の人々のようすが明らかにされるにつれ、それらの人々に対する責任問題が問われてきました。また、戦争に対する認識をめぐっても、近隣諸国からきびしい目が向けられています。(231) ・戦時中、慰安施設へ送られた女性や、日本軍人として徴兵される韓国・台湾の男性などの補償問題が裁判の場にもち込まれるようになりました。(231) ・1982年には、かつての日本軍の行動をめぐって、それを「侵略」ととらえるか、「進出」ととらえるかについての問題がおこり、中国や韓国・北朝鮮などから批判の声があがりました。(231)
東書	・戦後補償を求め、いくつもの裁判が、日本の国や企業を相手に起こされています。写真は、企業と和解して記者会見する韓国の男性。(215)
日書	・細川首相は1993年の議会での演説の中で、過去の「侵略行為や植民地支配」に対する「反省とおわび」を明言しました。また、村山首相は、1995年の戦後50年にあたっての談話の中で、「侵略」によってアジア諸国に「多大な損害と苦痛をあたえ」たとしています。日本政府の見解もこうして変わったのです。(231)

③拉致問題に関する記述

教出	・2002年には日朝首脳会談がひらかれ、国交の正常化をめざす、日朝平壤宣言に署名しました。会談のなかで、北朝鮮は日本人拉致の事実を認めて謝り、一部の拉致事件被害者の消息を明らかにしました。そして被害者の一部の帰国が実現しました。しかし、日本政府は、明らかにされていない被害者の消息、および被害者の家族の帰国を求める交渉を、なおもねばり強くつづけています。(199) ・日本と北朝鮮とは、まだ国交が開かれていません。(199)
清水	・1991年、両国による国交正常化の交渉ははじめられたが進展せず、中断した。2002年9月に日本の首相が訪朝してはじめて日朝首脳会談が行われ、国交正常化のための交渉が再開された。(222) ・この会談で、北朝鮮による日本人の拉致(むりやり連れ去ること)事件などの懸案事項が明らかにされ、交渉は再開されたが、事件が全面的に解決されていないこともあって、正常化の見とおしは立っていない。(2005年3月現在)(223)
大書	・朝鮮民主主義人民共和国とは、1991(平成3)年ようやく国交正常化交渉が始められました。しかし、たがいの主張にへだたりが大きくなり、交渉は中断してしまいました。2002年に北朝鮮で初の日朝首脳会談が行われ、国交正常化交渉の再開や、日本の無償の資金協力、北朝鮮の核やミサイル問題の解決をはかるなどの日朝平壤宣言が発表されました。いっぽう、この会談のなかで、北朝鮮側が日本

	人の拉致の事実を認めました。その後、日朝の国交正常化に向けた交渉は進んでいません。(222) ・「北朝鮮から帰国した拉致被害者(2002)」消息が明らかでない拉致被害者も多く、この問題は、現在も未解決のままです。(227)
東 書	・アジア諸国との関係では、1998年に、韓国の大統領が日本を訪問し、その後友好関係が強化されています。いっぽう、北朝鮮とは、国交のないままでしたが、2002年に、総理大臣の小泉純一郎が平壤を訪問し、国交正常化などの交渉を促進することで合意しました。しかし、拉致問題などもあって、その後の交渉は難航しています。(213) ・「拉致問題」はじめての日朝首脳会談で、北朝鮮が日本人を不法に拉致した事件が問題になりました。被害者のうちの5人と家族は帰国しましたが、未解決の問題も多く、国交正常化の動きは進んでいません。(213)
日 文	・「日朝首脳会議 2002年9月」ピョンヤンで日朝首脳会議が開かれ、交渉再開に合意した。このとき、朝鮮民主主義人民共和国は、日本人を拉致したことを認めた。(213)
日 書	・朝鮮民主主義人民共和国との国交正常化は、過去の植民地支配が問われるいっぽうで、日本人の拉致問題もあり、いまだじゅうぶんだialogがなされていない。 ・2002年のピョンヤン(平壤)宣言で日朝両国政府は、国交正常化を急ぐことに合意した。しかし北朝鮮による日本人拉致問題などの解決のため、交渉は進展していない。(227)
扶 桑	・「北朝鮮に拉致され帰国した人たち」2002年9月、訪朝した日本の首相に対し北朝鮮は日本人を拉致した事実を認めた。その後、拉致被害者の一部は帰国したが、今なお拉致されたとされる多数の日本人の消息が不明であり、問題は解決していない。(223)

23. 総括

本稿では、日本と韓国の中学生用の歴史(国史)教科書内容から、両国に関する記述を、比較・検討してきた。

日本と韓国は、歴史教育の体制が同一ではない。日本における中学校の歴史的分野は日本史を中心に世界史が融合されており、韓国の中学校国史歴史は、国史と世界史が分離している。

その上で、本研究は、日本の検定歴史教科書と韓国の国史教科書が、ともに共通する歴史記述、関係する歴史記述を持ちながら、現在、相互に比較し、補完し補足することができていないという現状に鑑み、両国の歴史教育に対し、まずは、双方の教科書に記載され、説明された歴史的事実を理解した上での、教育内容についての建設的な学び合いを可能とするための基礎資料の提供を目的とするものである。

韓国の中学校における国史教科書は、外交史、特に日韓交流史において、前近代においては文化的優越性が、近現代においては国難克服の視点が強調されている。他方で、日本の検定教科書では、とりわけ、近現代の両国関係について断片的な叙述になっており、全体の脈絡が容易には理解できない。

また、両国の近現代史の記述については、日本と韓国の叙述を比較するだけでなく、他の植民地国家と被植民地国家での教科書取り扱い問題と連動させて比較することも、求められよう。

将来的には、両国が、それぞれの教育課程において、中学校や高等学校の段階で、選択科目として、両国に関わる「東アジア史」または「現代社会」等の科目が別途に開設されることも、検討されて良いように思われる。

両国の教科書が抱え持つ問題点や課題を率直に踏まえた上で、まずは、両国の歴史記述、とりわ

け事実の確認について、謙虚に学び合う時のくることを願いたい。本稿は、そのための最初の試みである。

注釈

- *1 李明熙（韓国公州大学校）、二谷貞夫（元上越教育大学）、釜田聡（上越教育大学）、金恩淑（韓国教員大学校）、具蘭憲（韓国教育人的資源部）。
- *2 『中学校 国史』教育人的資源部 国史編纂委員会1種図書編纂委員会 2003年。本稿では、『世界の教科書シリーズ 韓国の中学校歴史教科書 中学校国定国史』（三橋広夫訳 明石書店、2005年8月）を使用した。
- *3 梅野正信「社会科教育における『記・紀・風土記』研究の再検討」、『社会科研究』40、1992年。
梅野正信「社会科教育史における『社会科歴史』の『神話』教育論」、『鹿児島大学教育学部研究紀要』44、1993年。
- *4 他に「出雲の国引きの神話」が記載されている（53頁）。
- *5 歴史的事実・根拠の下に定められたものではない点の説明は十分とは言えない。
- *6 他に「読み物コラム日本の神話」としてイザナギイザナミ神話、天照大神とスサノオの命の神話、大国主神とニニギの命の神話等について紹介されている（46～47頁）。
- *7 韓国の現行教育課程では、「倭乱が起きると、各地から起こった義兵の活動、李舜臣が率いる水軍の活躍、再編成された官軍の反撃など全国民の救国抗争を以って国難を克服したことを把握する」と記されている。
- *8 韓国の教育課程では、「倭乱後、日本の徳川幕府の要請によって、国交が再開されて朝鮮から派遣された通信使は、日本の文化発展に大きく寄与したことを理解する」と記載されている。
- *9 現在4社の教科書に記載されている。
- *10 韓国の教科書で、「創氏改名」の語を用いないのは、「編修用語」による。韓国では、多様な教科書が互いに違う用語を使うことから発生する混乱を防止するために、教科書の叙述に使用する用語を「編修用語」として国家水準で定めており、学界の研究成果を反映して時々において修正している。歴史用語は、1995年、2003年に修正されたが、「創氏改名」は1995年に「日本式姓名強要」という用語に変えられた。日本式表現でない用語で直そうとする意見を反映している。このため、現在の教科書では「創氏改名」という用語を使用していない。
- *11 韓国では、光州学生運動は、1920年代抗日運動の代表的事例であり、当時の社会の矛盾を打開しようとする学生中心の運動として評価されている。